

目次

2	図書館情報メディア研究科の概要
4	入学から修了まで
8	学位論文(2013年度修了)
12	学生の声
22	教育研究分野
44	研究科の活動

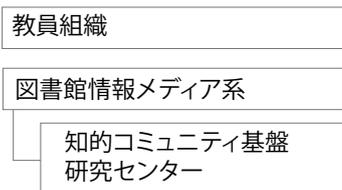
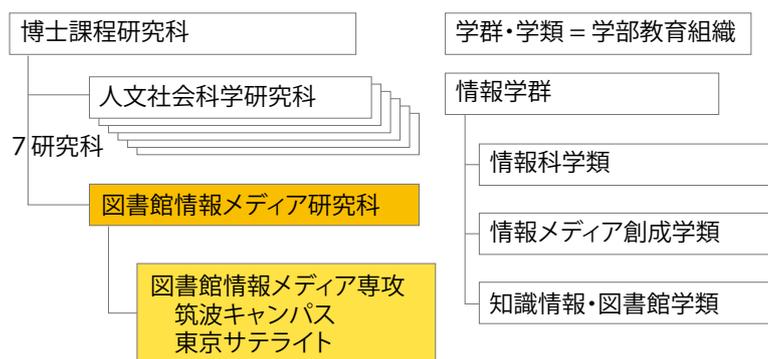


図書館情報メディア研究科の概要

図書館情報メディア研究科とは

図書館情報メディア研究科は、筑波大学大学院の博士課程7研究科の一つです。研究科には、博士前期課程2年と博士後期課程3年からなる区分制課程が設けられています。

関連の強い教員組織は、図書館情報メディア系であり、学部教育組織は、情報学群の情報メディア創成学類および知識情報・図書館学類です。



人材養成目的

図書館情報メディア研究科では、情報メディアによる社会の知識共有とその仕組みに係る研究を進展させ、新しい時代に向かって社会をリードする人材を養成します。具体的には、研究者、大学教員や高度専門職業人の育成をめざします。

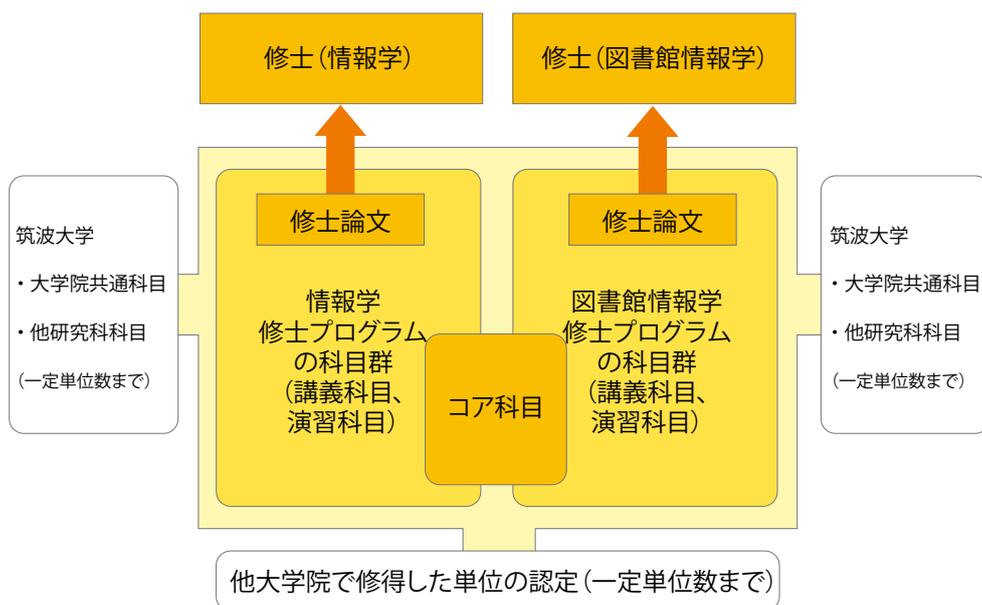
期待する入学者像

博士前期課程

本研究科の扱う領域は総合的かつ学際的な領域です。理系や文系といった分野を限定せず、21世紀の知識情報社会のフロンティアにおいて知識と情報の専門家になろうとする意欲のある人を幅広く受け入れます。

博士後期課程

図書館情報メディア分野にかかる研究テーマを有し、その研究を遂行するに必要な知識・能力を持つ人材を求めています。



図書館情報メディア研究科の前身は図書館情報大学大学院情報メディア研究科です。図書館情報大学は、1921年に開設された文部省図書館員教習所をルーツとし、その後、図書館短期大学(1964年設置)を経て、1979年に設置されました。1984年には、大学院図書館情報学研究科修士課程が開設され、1999年には区分制博士課程として情報メディア研究科が設置されました。2002年10月の図書館情報大学と筑波大学の統合により、大学院も新たな図書館情報メディア研究科としてスタートしました。

教育目標

博士前期課程

情報産業や図書館など情報提供サービスの実務においてリーダーシップを発揮する高度専門職業人として、理論と実践および創造力の調和のとれた人材、急速な発展をとげつつある分野にあって将来の動向を見通せる人材、研究者として必要な専門知識・技術を身につけ博士後期課程に進学する人材を養成することを教育の目標とします。

博士後期課程

知識情報社会のフロンティアを切り拓くことのできる研究者や、図書館情報メディア分野における最先端の研究と次世代をになう人材の育成に積極的に取り組む大学教員、および高い見識と高度な専門性を備えて国際的に活躍できる高度専門職業人の養成を教育の目標とします。

教育課程編成・実施の方針

博士前期課程

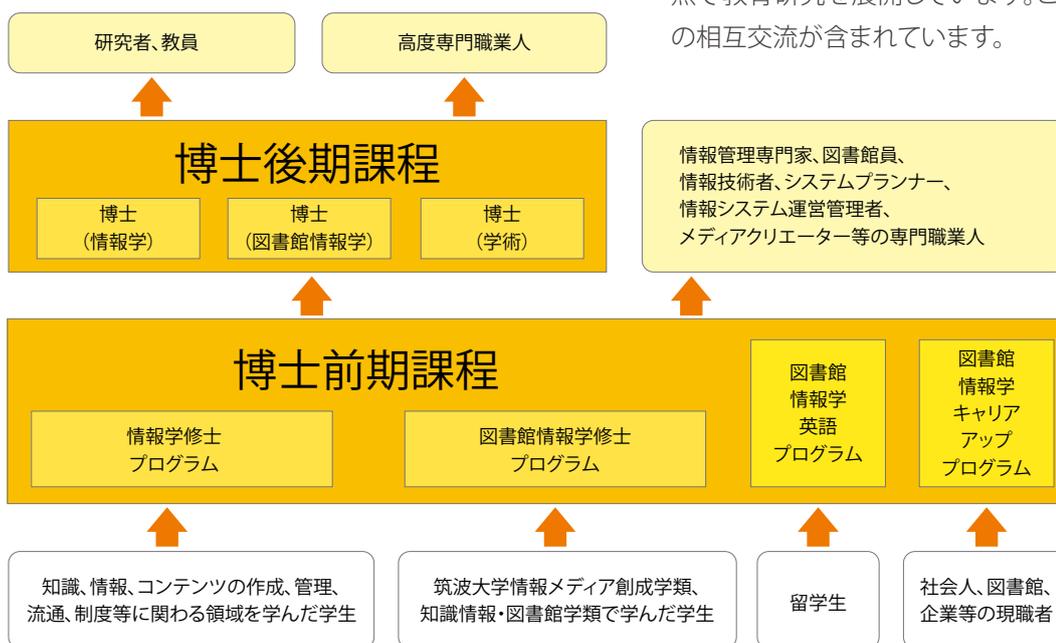
本課程では、教育課程の体系化という観点から、修士(情報学)と修士(図書館情報学)の2つの学位に対応したプログラムを提供します。学位プログラムの考えにもとづくカリキュラムを編成することで、教育の実質化を進めています。厳選された科目群によるコースワーク中心の課程です。修士(図書館情報学)では、さらに留学生対象の図書館情報学英語プログラムと現職者対象の図書館情報学キャリアアッププログラムを編成しています。

博士後期課程

博士後期課程では、各自の研究テーマを発展・深耕することで、理論的な展開力、洞察力、独創性、創造性、グローバルな視点を獲得する研究重視のカリキュラムとしています。

国外で学ぶ機会

本研究科は、国際的にも、図書館情報メディア領域における最大規模の教育研究組織です。研究科として、ミシガン大学情報学研究科(米国)、ピッツバーグ大学情報学研究科(米国)、デンマーク王立図書館情報大学(デンマーク)、ベトナム国立図書館(ベトナム)、北京大学信息管理系(中国)、上海図書館(中国)、釜山大学文献情報学科(韓国)と研究交流協定を結び、グローバルな視点で教育研究を展開しています。これら機関との協定には、学生の相互交流が含まれています。



入学から修了まで

入学試験

博士前期課程および博士後期課程の入学試験は、次のとおりです。

課程	試験区分		定員	試験期
	推薦入学試験		7名	7月期
博士 前期 課程	一般 入学	一般選抜	30名	8月期
		外国人留学生特別選抜		
	試験	情報学修士プログラム	および	
		図書館情報学修士プログラム		2月期
		図書館情報学キャリアアッププログラム		
図書館情報学英語プログラム	2月期			
博士 後期 課程	一般 入学	一般選抜	21名	8月期
		社会人特別選抜	若 干 名	および
試験	外国人留学生特別選抜	2月期		

博士後期課程の外国人留学生は、研究調書等を英語で記載し、口述試験を英語で受験することもできます。

なお、筑波大学大学院修士課程あるいは博士前期課程を修了し、引き続き博士後期課程に進学する場合、検定料と入学料は不要です。

入試日程については次のURLを参照してください。
<http://www.slis.tsukuba.ac.jp/grad/admission.html>

入学資格

博士前期課程にあつては、学群・学部段階での専門領域、博士後期課程にあつては、修士段階での専門領域にこだわらず、多様な領域から幅広く受け入れます。分野・経歴・年齢・国籍を問わず、学ぶ意欲・研究意欲の高い人を募集します。

また、博士前期課程にあつては、大学を卒業した者と同等以上の学力、博士後期課程にあつては、修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認められた場合にも出願資格が与えられます。この条件で志願する場合は事前に本研究科による出願資格審査を受ける必要があります。出願資格審査は書類審査のみで、費用は無料です。

選抜方法

博士前期課程

推薦入学試験は、所属長の推薦書のほかに事前に提出いただく研究計画(事前に希望する研究指導教員と連絡をとって作成したもの)と口述試験の結果とを総合的に判定します。

一般入学試験では、提出書類、TOEIC(IPを含む)あるいはTOEFL(ITP<レベル1>を含む)の得点を換算したものと口述試験の結果を総合的に判定します。

博士後期課程

博士後期課程の選抜は、提出書類と口述試験の結果を総合的に判定します。

口述試験方法

口述試験は、博士前期課程は約30分、博士後期課程は約60分です。研究調書等に基づいた研究計画や志望理由などについてのプレゼンテーション(博士前期課程は約7分、博士後期課程は約15分)とそれについての質疑応答です。

なお、図書館情報学英語プログラムでは、口述試験をskype等で受験することもできます。

博士後期課程では、出願までに指導を希望する教員と連絡をとって、あらかじめ研究テーマなどについての相談をすませておくことが必要です。

なお、博士前期課程では、入学後に研究指導教員を決めます。

2013年度・2014年度 志願者合格者数

		一般		留学生		社会人		英語プログラム		図書館情報学キャリアアッププログラム		合計		
		志願	合格	志願	合格	志願	合格	志願	合格	志願	合格	志願	合格	
博士 前期 課程	2013	推薦	—	—	—	—	—	—	—	—	—	13	12	
		8月期	29	17	3	1	0	0	—	—	5	3	37	21
		2月期	21	13	3	3	0	0	5	4	1	1	30	21
	2014	推薦	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	15	11
		8月期	41	26	4	2	0	0	—	—	0	0	45	28
		2月期	24	12	3	2	0	0	3	3	1	1	31	18
博士 後期 課程	2013	8月期	2	2	0	0	2	1	—	—	—	—	4	3
		2月期	6	3	0	0	2	2	—	—	—	—	8	5
	2014	8月期	3	3	2	2	3	3	—	—	—	—	8	8
		2月期	4	4	0	0	1	1	—	—	—	—	5	5

教育課程

博士前期課程

修士(情報学)と修士(図書館情報学)の2つの学位に対応したプログラムを提供しています。学生は所定の科目を30単位以上修得し、修士論文を作成します。

情報学修士プログラム・図書館情報学修士プログラム

情報にかかわる分野においてリーダーシップを発揮できる、幅広い知識と実践的な能力を身につけた人材、および博士後期課程に進学する者を養成します。

図書館情報学英語プログラム

国際的に通用する図書館情報学の実務者および研究者を育成します。特に日本の高度な情報技術をふまえた先端的な知識情報資源の管理・提供に関する知識や技術を身につけ、国際的に活躍できる人材を養成します。授業や研究指導はすべて英語で行われ、入学時期は秋学期(9月)で、2年間の修学期間のプログラムです。

図書館情報学キャリアアッププログラム

知識・情報を扱う専門性の高い業務に携わる人々を対象とし、図書館情報学を学ぶ、あるいは学び直すことで、知識・情報を分析、加工、表現、伝達、提供、利用するための高度な知識・技術を身につけ、自らの業務の課題を見出し、解決にむけた実践的研究のできる人材を養成します。

博士前期課程科目一覧

プログラム名 科目名	情報学 修士プログラム	図書館情報学 修士プログラム	図書館情報学 英語プログラム	図書館情報学 キャリアアッププログラム
講義科目	20単位以上、そのうち情報学修士プログラムの科目12単位以上	20単位以上、そのうち図書館情報学修士プログラムの科目12単位以上	20単位以上、そのうちResearch Methods in Informaticsを含む図書館情報学英語プログラムの科目12単位以上	20単位以上、そのうち図書館情報学キャリアアッププログラムの科目12単位以上
演習科目	情報メディア演習A(情報学)、情報メディア演習B、情報メディア演習C及び情報メディア特別演習(情報学)	情報メディア演習A(図書館情報学)、情報メディア演習B、情報メディア演習C及び情報メディア特別演習(図書館情報学)	Practical Seminar A, Practical Seminar B, Practical Seminar C, 及びSynthetic Seminar on MSc Research	情報表現法、研究の手引き、調査分析法、文献購読Ⅰ、文献購読Ⅱ及び特別演習のうちから10単位以上

博士後期課程

学生は、講義科目を4単位以上、特別実験および総合特別実験を6単位以上修得したうえで、博士論文を作成します。博士(情報学)、博士(図書館情報学)、博士(学術)のいずれかの学位が取得できます。

博士後期課程科目一覧

科目名	単位	摘要
講義科目	4単位	
特別実験A	1.5単位	研究指導教員が担当する科目
特別実験B	1.5単位	研究指導教員が担当する科目
総合特別実験I	各1.5単位	それぞれの副研究指導教員が担当する科目
総合特別実験II		

授業と単位

時限	授業時間
1時限	8:40— 9:55
2時限	10:10— 11:25
3時限	12:15— 13:30
4時限	13:45— 15:00
5時限	15:15— 16:30
6時限	16:45— 18:00
7時限	18:20— 19:35
8時限	19:45— 21:00

筑波大学は2学期制を採用しており、4-9月が春学期、10-3月が秋学期です。1時限(75分間)の授業を10回受講すると講義と実験・演習は1単位、特別実験は0.5単位です。

大学院説明会

次のURLを参照してください。
<http://www.slis.tsukuba.ac.jp/grad/admission/opencampus.html>

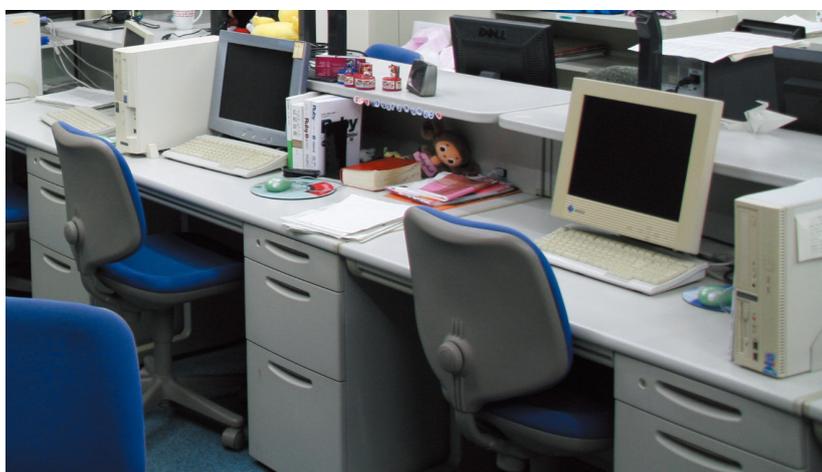
東京サテライト

図書館情報学キャリアアッププログラム(授業は平日の夜間と土曜日に開講)の教室として東京サテライト(東京キャンパス文京校舎)が用意されています。

東京サテライトでは、筑波キャンパス(春日エリア)と同様なネットワークアクセスが可能であり、附属図書館のオンラインジャーナルなどにもアクセスできます。



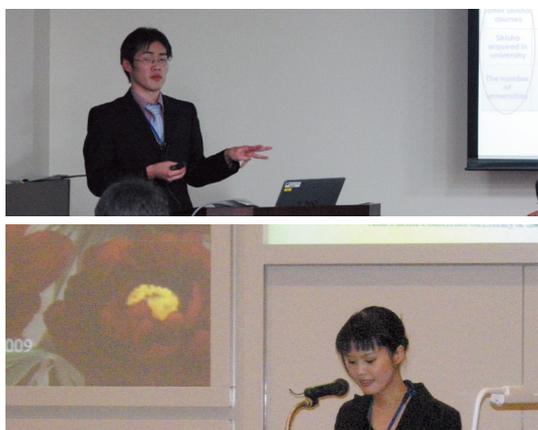
▲ 筑波大学 東京サテライト



▲ 大学院生の研究環境

学会発表

大学院生が国内外の学会に出席して発表する際の参加費や旅費を支援する制度があります。2013年度は延べ40名以上がこの制度を利用して学会発表を行ないました。



▲ 学会発表の様子

研究環境

春日エリアでは、大学院生には個人用の机と、夜間・休日の図書館情報学図書館を始めとする建物への入室、コピー機などに使うICカードを貸与します。また、コンピュータアカウントを申請すれば、Webページスペースなど、潤沢なコンピュータ資源が利用できます。

T A・T F・R A

T A (Teaching Assistant)として学群や大学院の授業の補助を行う機会およびT F (Teaching Fellow)として授業担当教員のもとで授業に参画する機会ならびにR A (Research Assistant)として教員との共同研究を行う機会があります。

2013年度は、学群のT Aとして、博士前期課程の院生延べ72名、後期課程の院生延べ16名(TF: 4名含む)が任用されました。R Aとしては、博士後期課程の院生5名が任用されました。

学費と 授業料免除

入学時の経費(2013年度)は

入学料 282,000円

授業料 535,800円

です。経済的理由により納付が困難な学業成績優秀な者には、授業料を免除する制度があり、多数の学生が授業料の全額・半額若しくは1/3免除を受けています。

奨学金

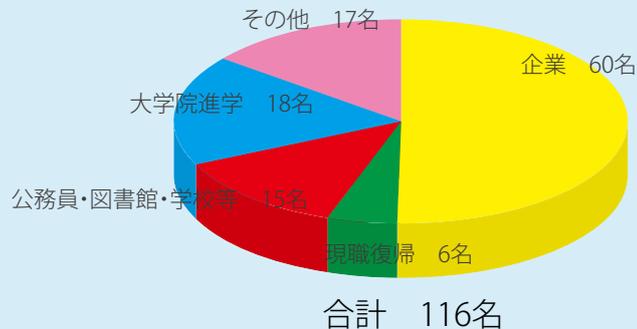
奨学金としては、日本学生支援機構の奨学金制度が利用できます。2013年度は、博士前期課程で30名の学生が、博士後期課程で6名の学生が奨学金を受けています。なお、この奨学金には返還免除制度があり、博士前期課程及び博士後期課程の学生が全額もしくは半額免除の適用を受けることができます。

また、2010年度に創設された本学独自の奨学金制度「つくばスカラシップ」や、地方公共団体、民間の育英団体の奨学金事業も多数あります。博士後期課程の大学院生には日本学術振興会の特別研究員の道もあります。

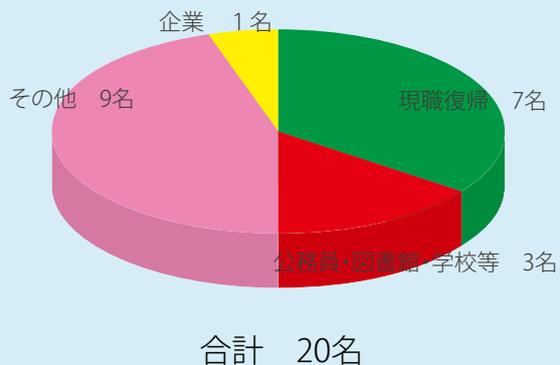
学生表彰

修士論文が優秀であった博士前期課程の学生や、優れた研究成果をあげた博士後期課程の学生は、研究科の学位記授与式において表彰されます。また、その研究成果が学外においても高い評価を得た大学院生が日本学生支援機構の第一種奨学金を利用している場合は、奨学金返還免除選考の対象者となります。

修了生の進路



2010~2012年度修了者進路(博士前期課程)



2010~2012年度修了者進路(博士後期課程)

学位論文(2013年度修了)

修士(図書館情報学)

- 公立図書館における指定管理者の導入要因
- Twitterにおける学術関連情報発信者の特徴分析と分類
- 大学図書館におけるソーシャルメディアの利用に関する実態調査
- 歴史意識と資料保存観
—横浜市域における歴史編纂を題材に—
- 20世紀前半アメリカにおける日系人の図書館意識
—アメリカ化の視点から—
- Web上の郷土学習資料の利用性向上を指向した
アノテーションツールの開発
—コンテキスト情報を与えるアノテーションと
そのLinked Open Data化—
- 大学図書館における電子ジャーナルの閲読と引用の
オブソレッセンス分析
- 論証型レポートにおけるアウトライン構成に関する
教育方法の検討
- 対面とインターネット上の読書会が知識獲得・視点取得・
情動共有に及ぼす影響
- 大学生のタスク管理に関する研究 —筑波大学を対象に—
- ラーニングコモンズの構想・運営・受容
- EUにおける移民を対象とした公共図書館サービス
—社会的統合と生涯学習政策の観点から—
- Twitterにおけるバーストの検出と生起要因に関する分析
- 家庭環境が幼児の読書能力に及ぼす影響
- 中高生を対象としたメディア・リテラシー育成のための
NIE授業の開発と評価—「選択」活動を中心として—
- マンガ書誌データからのFRBR第1グループ実体の同定と実体間
関係の発見—Linked Open Dataを利用したFRBR化の手法—
- 貸出履歴を利用した蔵書検索結果のリランキングに
関する研究
- アメリカの大学図書館における学生アシスタントについて
- 中国の「個人情報保護法」のあり方に関する考察
—日本における個人情報保護法の制定と施行を参考に—
- 五山僧侶の漢籍読書傾向について
—明代の読書傾向と比較して—
- 図書館に関する新聞記事の内容調査
- 中国における大学図書館の学習支援について
—北京大学図書館を事例として—
- 新潟県立図書館における市町村立図書館支援サービスの
史的研究

修士(情報学)

- クラウドソーシングによるデータ列挙処理に関する研究
- タイムライン型表現を用いた調理手順の視覚化
- 統計的機械翻訳における語義に基づく大局的な情報を用いた
語彙モデルに関する研究
- アジャイル開発モデルに基づくメタデータスキーマ設計手法と
支援システム
- タブレットPCを用いた映像制作学習プログラムの開発
- 特許分類の共起を用いた技術動向調査手法に関する研究
- マンガ情報資源のLinked Data化によるアクセス支援のための
オントロジー開発
- 学習マンガの表現形式の比較
- 既存メタデータスキーマを用いたメタデータインスタンスからの
スキーマ推定手法
- 半教師ありトピックモデルを利用したTwitterユーザの生活に
関わる地域の推定
- スキーマ進化に伴うXPath式修正アルゴリズム
- 投稿活動に基づくマイクロブログユーザのプロファイリングに
関する研究
- 実生活tweetに対する局面の階層的推定法に関する研究
- 浮上する記憶
—振り返りを支援するライフログブラウジングシステム—
- データ転送量を考慮したHadoop性能改善方式の提案と評価
- パーソナリティー表現における色情報の判断指標に関する研究
—心理アセスメント手法の図式投影法における適用を中心に—
- 視覚特徴はどのような構造で反応と結合されるか
—刺激反応連合学習課題を用いた検討—
- 遠隔ビデオ環境における二者間共食コミュニケーションの分析

博士(情報学)

Preserving Records in the Cloud – A Model to enhance Metadata Interoperability in a Cloud Environment

Jan Askhoj

In recent years there has been a huge growth in the use of cloud computing for digital content. With this move to cloud computing, organizations are gaining a number of benefits, such as economies of scale, reduction of capital expenditure, on-demand scalability and so on. However, the outsourcing of hardware, software and data storage to a third party makes it more difficult to guarantee the long-term preservation of archive worthy content.

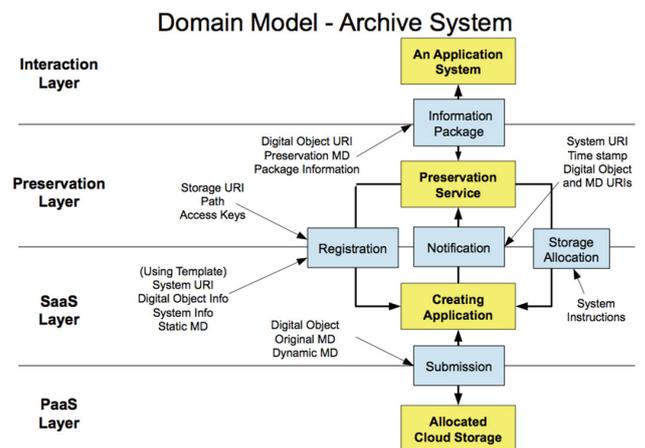
Our research examined cloud computing from an archiving perspective and explained how this new technology fits with existing models of digital archiving, exemplified by the Open Archival Information System (OAIS) reference model. Based on the findings of the examination, we proposed a model for a cloud archiving system to improve interoperability between Producer and Archive using concepts and information types from OAIS.

We used the lessons learned from the model to design an application profile using the Singapore Framework for Dublin Core Application Profiles. The application profile was an important step towards implementation, because it allowed us to analyze the different data types present in a cloud archive.

The final step towards implementation was the creation of a domain ontology for cloud archives, based in part on the PREMIS Editorial Committee ontology for the PREMIS Data Dictionary. The domain ontology was based on our original layered model of cloud computing where lower layers provide shared services to higher layers, and it focuses on the submission of generic Submission Information Packages with PREMIS preservation metadata.

The ontology defined a common vocabulary for cloud archives, and defined the roles and responsibilities for data creation and transfer, including the registration of cloud-based content creation systems. We defined the classes, object properties, data properties and annotations necessary to describe the different agents, objects, events and rights that comprise a cloud archive built on our model.

We evaluated the ontology with a prototype system, using real-world examples of cloud systems, digital objects and metadata. We found that the ontology was able to describe the chosen components successfully, and that it improved metadata interoperability between content creating applications and the services providing preservation metadata.



(研究指導担当教員 杉本 重雄)

博士(学術)

フランス社会における上級司書養成制度の考察

岩崎 久美子

フランスは、資格・学歴に基づく職業階層が明確に規定され、国の定めた職階制に応じた人事処遇がなされる国である。図書館員にあって、この資格・学歴による階層構造の上位に位置づけられるのは、上級司書 (conservateur) と呼ばれる図書館運営機能を担う管理職である。

本研究は、このような上級司書に着目し、文化資本の提供機能を有する図書館が、上流階層と結びつき発展してきた歴史と、その担い手である上級司書が、文化的再生産の過程を経て選抜、養成される実態と課題を、インタビュー調査と質問紙調査で実証したものである。

その内容としては、第一に、フランス革命期に貴族や僧院から没収した貴重本を収納する国立図書館や、国が指定する地方の市立図書館、そして、蔵書の貧弱さや財政難などの課題を抱える大学図書館の歴史的経緯と現状を明らかにした。また、学術図書館と対比的に、後発を余儀なくされた近代的公共図書館については、民衆図書館設立運動、米国の公共図書館思想の影響、国民教育省図書館・公読書局創設による近代化、メディアテークと呼ばれる文化施設の創設など、1960年代の大衆文化の成熟によって充実に至る系譜を考察している。

第二に、上級司書養成機関として、1821年に創設され、名門グランゼコールとして現存する国立古文書学校、米国の影響を強く受けた1963年創設の国立高等図書館学校、そして、国立古文書学校卒業生を取り込み、国立高等図書館学校の発展型として創設された1992年の国立図書館情報学高等学院 (ENSSIB) の三つの学校の特徴と、上級司書養成制度が一元化されるまでの変遷を考察した。その上で、現在、国の唯一の上級司書養成機関となった国立図書館情報学高等学院 (ENSSIB) の教育の有効性を、調査に基づき検討した。結果、学生内部に、①国立古文書学校卒業生、②上級司書外部試験合格者、③教員などの転職制度である上級司書内部試験合格者、そして、④現職図書館員の中の昇進対象者といった四つの下位集団があり、異なる経歴、教育ニ

ズ、配属先に応じてカリキュラム改善が試みられていること、また、教育内容の如何を問わず、一カ所で一定期間集中して教育することが、上級司書としてのアイデンティティを付与する機能を持つことを明らかにした。

第三に、以上のフランスの図書館の社会的土壌と上級司書養成の制度を踏まえた上で、図書館種の異なる8名の上級司書のライフストーリーを分析し、最終的に、親の学歴・職業に同形の文化的再生産は、競争試験で入学する上級司書試験合格者よりも、選考入学する国立古文書学校の卒業生に顕著であること、また、専門職としての上級司書の社会的イメージは、伝統的グランゼコールである国立古文書学校の卒業生に牽引されていることを検証している。



▲ リヨン郊外にある国立図書館情報学高等学院 (ENSSIB) 建物

(研究指導担当教員 溝上 智恵子)

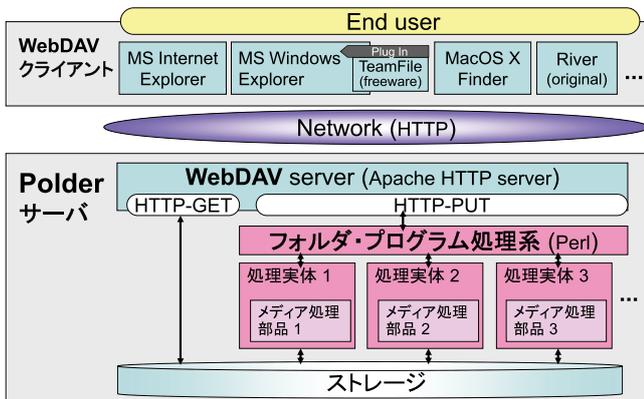
博士(情報学)

エンドユーザによるメディア処理のための 部品統合環境の構成法に関する研究

赤間 浩樹

本論文の目的は、メディアデータの加工・編集を誰でも行えるようにすることを狙いとした、エンドユーザのためのメディア処理部品の統合環境を構成する方法を明らかにすることである。学生時代に少しだけプログラミングの授業を履修したが、それ以降は全くプログラミングを行わない PC 利用者は極めて多い。その人々が、デジタルカメラやスマートフォンなどの携帯型デジタル機器の普及に伴って大量のメディアデータを保有するようになり、加工や整理といったメディア処理を DIY(Do It Yourself) で行いたいという要求が高まっている。

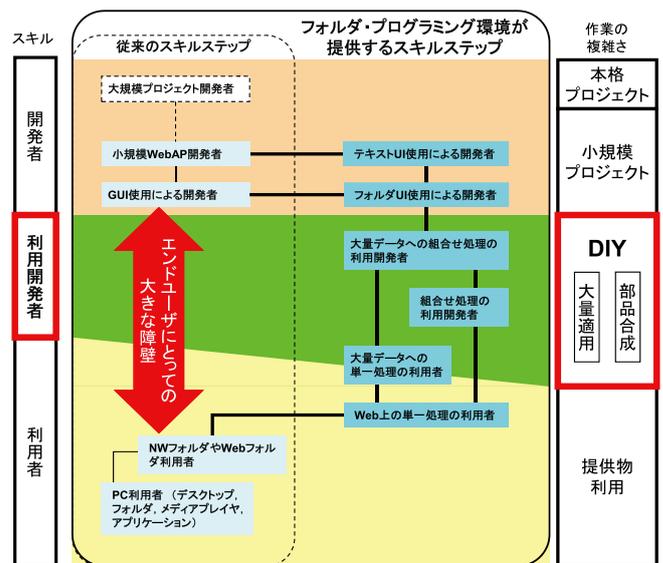
本研究では、すでに多くの PC 利用者が日常的に利用しているフォルダ管理という作業の経験と知識に着目し、それをプログラミングに活用することで、エンドユーザがプログラミング・スキルを習得する際の障壁を低減する。そのアーキテクチャとして、フォルダ管理を実現している Web フォルダを拡張するフォルダ・プログラミング環境の提案を行い、その実現性を POLDER の実装によって確認した(図 1)。フォルダ・プログラミング環境の核となる考え方は、フォルダへのデータファイルの Drop で処理が起動され、フォルダ名から対応する処理が自動的に決定・実行され、結果がフォルダ内に保存されるという仕組みである。フォルダの入れ子構造に基づいて連鎖・並行・条件分岐などの制御構造を拡張することで基礎的なプログラミング環境を実現している。更に、フォルダに複数ファイルを Drag&Drop することでファイルを一齐に処理する仕組みによって、大量のメディアデータへのメディア処理を簡便にしている。



▲ 図1 POLDERアーキテクチャ

提案する環境を用いた複数の利用者実験を行い、本研究で提案するフォルダ・プログラミング環境が、本研究で課題とする要件を十分満たす環境であることを明らかにした。また、比較実験を通して、これらの仕組みが効果的に利用者に訴求することを定量的に示した。提案する環境によって、日常的に PC は利用しているがプログラマとは言えないエンドユーザが、大量のメディアデータに対するメディア処理を DIY で行うことができるようになる。更に、DIY でプログラミングを始めたエンドユーザが、より高度なメディア処理を実行するために必要となる学習のなだらかな傾斜の実現に対して、本環境は、複数の新たな中間ステップを提供し支援することを論じた(図 2)。

本論文は、これらの議論を通して、本研究が目的とするエンドユーザのためのメディア処理部品の統合環境の構成法として新規性と有用性を備えていることを明らかにしている。



▲ 図2 新たな中間ステップ群となだらかなスキル成長

(研究指導担当教員 佐藤 哲司)

博士前期課程 野崎 裕司

博士前期課程の可能性

博士前期課程は短いです。学部生活は4年間ですが、博士前期課程の2年間です。それだけの時間をみなさんどのように使いますか。授業を受け、修士論文を書いて必要な単位を取り修了。これが、博士前期課程の流れです。では、そこに何を付け足すか。

アルバイトやサークルといった学部生時代にやっていたことももちろんできます。でも、せっかく博士前期課程に進んだので今までしなかったことを考えてみましょう。

発表から広がる世界

私は大学院生になって初めて体験したことは、「学会での発表」です。学部生の時から授業やゼミで、発表する機会がありましたが、院生になり、学会でも発表するようになりました。学会での発表は学部生の時より、多くの準備をします。しかし、学会での発表は、多くの専門家の方に意見を頂ける貴重な機会であるとともに、人の繋がりを作る絶好の機会でもあります。

特に学会での発表は、普段会うことができない人たちに会えるよい機会です。自分の研究資料で使っている論文や本を書いている人と会うこともあります。

今回、「発表から広がる世界」について、述べましたが博士前期課程の可能性は他にもあります。ぜひ、探してみてください。



▲ 学会発表の様子

博士前期課程 坪井 優美

はじめに

私は図書館情報学修士プログラムを選択し、学校教育におけるICT機器の活用やICT機器を含めたメディア環境の影響に関する研究をしています。現場の先生や、学生の方と接する機会が多い領域です。また私は実家から通学しており、1時間ほど電車で揺られながら大学にきています。研究などに熱中するあまり、「移動時間すら惜しい!」と思うときもありますが、考えすぎた頭を休めたり、研究や授業に使う資料を読んだりするのに最適な時間でもあります。

入学して思ったこと

授業など、あらゆる場面において自分の意見を問われることがとても多いです。そのため、自然と様々なテーマに対して「自分はどう思うか?」という意識を常に持つようになりました。また、どの授業も少人数形式なので、学生同士や先生と気軽に意見交換できるのもいい刺激となっています。その代わりに、授業で学ぶことはとても濃いので、履修計画はしっかりと行う必要があります。

多分野である強み

私の所属する研究室では、大きく分けて二つの領域を研究している人たちがいます。それだけでなく、この研究科で研究されている方々の領域は、実に多岐にわたります。皆さんと話していると、新たな視点に気づかされたり、そのとき聞いたことや思ったことが自分の領域の思わぬところで役にたったりすることもあります。中には有志で勉強会を開いている方々もいらっしゃいます。このように、知識のやりとりが盛んに行われ新たな研究に繋がっていくのは、この研究科の最大の特徴であり、強みだと思っています。

博士前期課程 豊島 圭佑

ベンチャー経営と大学院生の二重生活

昨年の夏、私は大学時代の友人とジセカイというベンチャー会社を立ち上げました。情報技術やデザイン、自分たちに出来る事、やりたい事はなんでもするような会社です。現在は具体的にスマートフォンアプリの開発や、Webサイトのデザイン・制作等を中心に行っています。事務所や取引先が東京にあるため、頻繁に東京とつくばを行き来しています。仕事と研究を並行して行わなければならない、失敗する事も多々ありますが、充実した毎日をすごしています。

また、先行研究の調査と、類似事業のリサーチのように、研究の中で行ってきた作業手法が、仕事でも活かせる事があり、社会で必要となる技術を研究を通して学ぶ事も出来ているのかもしれないと感じています。

研究について

私は筑波大学情報メディア創成学類から図書館情報メディア研究科に進学しました。大学時代は、分析化学の研究を行う研究室に所属しており、卒業研究として実験装置のシステム開発を行っていました。情報系の学類でありながら物理化学の実験を体験でき、勉強になるとともに研究に面白みを感じました。

現在はコミュニケーションデザイン研究室に所属しています。ここではコンテンツ制作やワークショップ、教育メディアに関する研究を行っています。所属する学生のテーマも幅広く、漫画、映像制作、教育などを扱っています。

私はこの研究室で、元々興味が会ったコンテンツ制作やユーザーインターフェースなどについて研究したいと思い、さまざまなテーマについて勉強しています。

博士前期課程 大塚 淳史



“疑問”と過ごす大学院生活

例えば、現実世界のオブジェクトに映像を投影することで非現実的な状態を視覚的に再現するプロジェクションマッピングについて研究を行っていました。研究の進め方やテーマ設定等でつまずいてしまうこともしばしばあり、現在はスマートフォンのユーザーインターフェースについて研究しています。

情報についての見方が広がる研究科

筑波大学には専門分野が異なる様々な学生が集まっています。中でも、図書館情報メディア研究科は、情報メディアの開発、管理、社会に与える影響等、さまざまな視点から研究が行われており、それだけ情報に関係した研究分野が多様化している様に思われます。ともあれ、こうした研究に携わっている先生方の授業や、学生との意見交換の機会は、自分の「情報」という事柄についての見方を大きく広げてくれたのではないかと感じています。

私は、“疑問”に着目した研究を行なっています。現在では、知りたいこと、分からないことはWeb検索エンジンが解決してくれますが、そのためには、“疑問”からクエリというキーワード組を作らなくてはなりません。そのため、多様な情報をWeb検索によって入手するためには、クエリを作り出すための“疑問”がたくさん必要になります。しかし、一人で思いつく“疑問”の範囲には限界があります。そこで、他人の“疑問”をかりることで、ユーザが考えた以上の情報が検索できるようになると考え、質問回答サイトの質問記事を“他人の疑問”として利用した「“疑問”によるWeb検索システム:QAque」を開発しました。

私の大学院での研究生活も、常に“疑問”と隣合わせでした。研究が進まないときは「なぜうまくいかないのか?」という“疑問”と格闘する毎日でしたが、それ以上に、実験結果が出て、研究がまとまったとき、「この結果はなぜこうなったのだろう?」とか、「ここはもっと改良出来る方法があるんじゃないか?」といった“次に進むための疑問”が発見できます。そして、その新たに生まれた“疑問”に対する答えや解決方法を考えている時が、私の研究生活で最も楽しい時間です。進めれば進めるほど、“疑問”が増えていく。それが研究の醍醐味ではないかと思います。

初の国際会議へ

1年の冬に国際会議に挑戦するために英語論文を執筆しました。私はこれまで、英語論文の執筆経験がなく、就職活動の時期と重なっていたこともあり、投稿には大変苦労しましたが、その分得

るものも多く、大学院生活で最も成長できた時期でした。そして、論文が採択となり、Web系で世界最大の国際会議の一つであるWWW2012に参加しました。英語での口頭発表は、反省するところも多く、ほろ苦いデビュー戦となりましたが、Webの創始者であるTim Berners-Lee氏をはじめ、世界のトップ研究者と交流することができ、非常に貴重な体験となりました。

まだ見ぬ“疑問”への挑戦

大学院生活では、次々と新たな“疑問”と出会うことになります。その中には、自分一人では解決できない“疑問”もあると思います。しかし、一人で全ての“疑問”を思いつけないのと同じく、一人では解決できない“疑問”も、仲間の「力」をかりることで解決できます。図書館情報メディア研究科は、多様なバックグラウンドを持つ先生方をはじめ、同期、研究室のメンバーなど、かりることのできる「力」がたくさんあります。そして、解決した“疑問”は社会をよりよくするための「種」となっていきます。みなさんも、図書館情報メディア研究科に入って、まだ見ぬ“疑問”に挑戦してみてください。



▲ Web検索システム:QAque

博士後期課程 常川 真央

研究について

私は学習コミュニティの形成を支援するための人物推薦手法をテーマとして研究しています。研究における実際の作業をなかなか想像しにくいかもしれませんが、具体的には関連する論文の読解、プログラムの開発、実験の実施といった作業を日常的に行います。研究の過程は研究室のゼミで発表し、研究の参考にします。博士後期課程では学部4年生や博士前期課程の学生の研究指導側にまわることも多々あります。指導や教育も将来大学教員となるために身につけるべき能力であると考えているため、できるだけ時間を割くように心がけています。研究成果がまとまったら、論文を執筆し学術誌に投稿するか外部の学会で発表します。大学では国際会議での発表が推奨されており、私もマレーシアにて国際会議発表を行いました。そのほか、研究に関連する数学やプログラミングの勉強の時間を確保するために、週に1・2回程度の頻度で他の研究室の院生と共に小規模な勉強会を実施しています。

研究以外の活動

研究とは直接の関係はありませんが、図書館システムに関する調査のために海外のイベントに参加したり、IT勉強会に参加したりすることがあります。最近では得た知見を活かした講演を依頼されることもあります。大学院では特定の事柄について専門家になることが期待されているので、こうした活動も大事です。また、趣味的な活動としてはビブリオバトルと呼ばれる競技を時折行い、他大学の大学生と交流を深めています。ビブリオバトルとは複数人で行う知的書評合戦です。最近では東京都主催でビブリオバトル首都決戦と呼ばれる全国

大会が開かれており、私は2011年の首都決戦において特別審査員賞をいただきました。このように大学の中に閉じこもらず、外部のコミュニティや人々との交流を行うことで多様な知見や価値観に触れるように努めています。

生活スケジュール

週4日が研究室、週1日は国立国会図書館にて非常勤調査員の仕事を務めています。研究所で補助のアルバイトや仕事に就きながら大学院生活をおくっている方は、土・日は自宅にて研究を行います。博士後期課程では履修科目が少ないので、自主的に勉強や研究を進める必要があります。必要な時間を確保できるような自分なりの生活スタイルを確立することが大事ですね。

以下に生活の個々の状況について簡単に記します。

授業：博士後期課程で履修する科目の大半が指導教員やその他の教員からの研究指導が主な内容となります。

ゼミ：週に3度、4年生向けのゼミと院生向けのゼミがあります。

休日：平日では大学以外の場所に寄る時間が無いため、買い物などに出かける時間に使います。そのほか、IT関係の交流会に出かけることもあります。

食事：時間が時間なので外食であることが多いです。実家で夕食を作ることもあります。

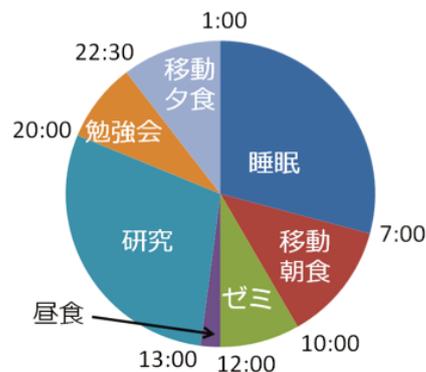
移動：実家から電車で通学しています。移動中では論文や専門書を読んでいます。研究室では論文の執筆やプログラム開発を行うので、意外に重要な時間帯です。



▲ ビブリオバトル首都決戦の様子



▲ 海外での学会発表の様子



▲ 一日の主なスケジュール

博士後期課程 安蒜 孝政

大学院生+図書館員

現在、図書館情報メディア研究科大学院に在籍しながら、独立行政法人海洋研究開発機構の図書館員として働いています。私は2006年筑波大学図書館情報専門学群(現:知識情報・図書館学類)に入学し、2010年図書館情報メディア研究科博士前期課程を経て、2012年博士後期課程に進学後、図書館の現場を知りたいと思い、研究の傍ら就職先を探していました。そこで進路担当の先生から現在の職場を紹介していただき、2012年8月から働いています。覚えることはまだまだ多くありますが、充実した生活を送っています。

研究生活

私の研究分野は大学生の情報探索行動です。大学生が図書館をどのように利用しているのかを、筑波大学中央図書館を実験場として大学生を被験者とした実験から検証しました。実験では被験者や図書館員、多くの方のご協力をいただきました。また、実験から得た知見をもとに研究室の先輩との共同研究なども行いました。

図書館員として働きながら、現在も研究活動を続けています。私が所属している研究室は社会人院生が多く所属しています。そのため、指導教員は夜間や土・日曜日に茗荷谷駅そばにある筑波大学東京キャンパス文京校舎で社会人向けゼミを開催して下さいます。自分の職場以外の方との意見交換や研究に関する相談も行えますので、時間の許す限りは参加するようにしています。

昼間は社会人として働いていますので、研究は移動時間中に論文を1本読むなど隙間時間を活用するようにして



被験者への聞き取り調査中

います。筑波大学ではリモートデスクトップを用いることで学外からでも大学内と同じ情報環境を利用できます。また、文京校舎でも大学院の授業が開講されていますので、社会人でも仕事帰りに寄ることができます。忙しい社会人でも学びやすい環境であると思います。



大学生の書架での視線軌跡を計測・分析

業務でも活用できる研究・知識

就職後には自分の不勉強さを痛感することが多くありました。図書館の現場では図書館システムの保守・点検や著作権関係、学術情報流通への理解や利用者対応など様々な知識が求められます。もちろん、今まで学んだことを活かせる部分もありますが、就職後も常に知識を更新していく必要があると感じています。大学院での授業やゼミで得た最新の情報を業務に活かすことができるため、とてもありがたいです。また、業務上でのひらめきや疑問点を研究に活かすことで、日々の業務を客観視し、理論的な裏付けや背景を学ぶモチベーションにもなっています。

研究を通して培った人脈や物事を整理する能力などは業務に活かせることも多いです。特に社会人になると、事前知識のない人に専門的なことを説明する機会が多くなりました。その際には学

会やゼミでのプレゼンテーション経験を活かし、情報を整理して相手に伝えることを心がけています。学問知識以外にもこのような基本的な技能を磨くことができるのも大学院ならではの醍醐味だと思います。

最後に

図書館情報メディア研究科は先生との相談次第で様々な取り組みができます。自分から新しい取り組みを提案してもいいですし、ときには人の提案のついでにもいい経験となります。また、図書館関係の職に就いている方には日々の業務の理論的な裏付けを学ぶことができる絶好の場であると思います。図書館情報メディア研究科はそういった意味ではとても懐の広い研究科です。いろいろなことにチャレンジしてみたい方は是非、図書館情報メディア研究科を目指してください。



2011年度学位授与式(最左が筆者)

博士前期課程修了 安武 宏珠

はじめに

大学4年の夏に、約10カ月の交換留学を終え、他国からの留学生に比べた自分のあまりの無知と力不足に大きな危機感を覚えて帰国しました。もっといろいろなことを学びたい、そう強く思って進学を決意しました。

地方の私立大学出身で経済学専攻だった私が筑波大学の図書館情報メディア研究科に入学できたのは、本研究科に多方面からの人材を受け入れる態勢があったからだと思います。2年間で私は、情報メディア社会分野の松縄正登先生と村井麻衣子先生のゼミに属し、著作権法という新しい分野で、先生方の御手を煩わせつつ、勉強のチャンスが大いに生かすことができました。

ゼミ

初年度、基礎知識の無かった私は、知的財産法の専門書を読んでレジュメにまとめ、ゼミで毎週発表しました。同時に、修了単位の大半を取得する計画で授業を取っていたので、授業の課題と合わせてこなすのに必死でした。

修士論文のテーマは、1年次の中頃に決まり、その後著作権の勉強をしつつ、必要な論文や資料を収集して読み、レジュメにまとめて毎週のゼミで発表し、意見交換をしました。研究では、思うように欲しい資料が集まらない、英語論文を翻訳する必要がある等、大変なこともありましたが、2年次の中頃になり、修士論文として本格的に執筆し始めてからは、蓄積してきたレジュメが基盤となってくれました。年末に大詰めを迎えたため、実家には帰らず、独りで執筆していると知らぬ間に新年を迎えていました。

常にゼミの課題に追われていたような気がしますが、そのおかげで、3度の学内発表会と外部の学会発表でも準備を何とか間に合わせることができ、論文も期限内に余裕を持って終わらせることができました。ご支援いただいた先生方・友人には心から感謝しています。

授業

本研究科は学問領域が多彩であることから、授業内容も多種多様ですが、どの授業も豊富な知識とご経験を持った教授陣に教えていただくことができます。また、本研究科の特徴として、教授と学生との距離が近いこともよく言われており、学ぶ意志さえあれば、先生方に身近で親身になってご指導いただけるため、非常に恵まれた環境であると思います。

私が特に好きだった授業は、綿抜豊昭先生の百人一首の授業でした。百人一首の絵からわかる情報の解説から始まり、登場人物の人生、和歌から読み取れる心情、時代背景、恋愛模様などは、講義を聞いているだけで、毎回とても興味深く、好奇心に訴えるものでした。

学生生活

時間の使い方に関しては、かなり融通が利いたと思います。私は、指導教員にTAを任せて頂いたほか、服飾のアルバイトをしました。TAでは、アシスタントの傍ら学群生の授業を聴講し、アルバイトでは社会勉強をし、いずれも学ぶことの多い貴重な経験となりました。また、友達とご飯や飲み会等でいっしょに過ごした時間も、楽しい思い出です。

終わりに

今、社会人一年生として、新しい経験に戸惑うこともあります。図書館情報メディア研究科に単身飛び込んだ時の勇気は、新しいことに挑戦する際の自信になっていると思います。

修士論文の執筆も、研究も、ゼミも、アカデミックな環境で学べたこと、また、学びたいという願望を成就できたことは、本当に有難いことであり、私にとっては貴重で必要な2年間でした。

これから進学される皆様が実り多い研究生を送られることをお祈りいたします。

(2011年度博士前期課程修了)

博士前期課程修了 福田 純子

入学のきっかけ

「はやく図情においでよ。ね? 楽しいよ。」
当時の職場の先輩(社会人学生)にこう誘われたのは、今から約10年も前のことです。迷うこと数年、ついに入学する決意を固めました。

履修科目について

カリキュラムは年々変わりますので参考にはならないとは思いますが、通常の授業のほかに図書館経営管理コースも併せて受講しました。授業によってレポートや発表が多いものもありますが、通勤時間などの隙間時間を利用して準備をしました。

研究と論文執筆

日々の授業のレポート作成であれば隙間時間を見つけて行うこともできますが、研究や論文執筆となると、どうしてもまとまった時間が必要になってきます。私の場合は、お盆と年末年始に長い休暇がありましたので、その時期に集中して研究を進めるようにしました。寝る間も惜しんでというよりも、健康を考えて最低限の睡眠時間はきちんと確保するように努めました。

社会人学生生活で大切なこと

社会人学生生活を送るにあたっては、やはり周囲の人々の理解を得ることが大切だと思います。

まず職場ですが、私の場合には職場の皆さんが理解し応援してくれましたので、大変助かりました。また家族の理解も大切です。特に女性にとっては、仕事+大学院の生活は家事の時間を縮小し、家族に肩代わりしてもらうことにほかなりませんから、事前の理解は必須だと思います。この点も家族が家事

だけでなく、研究についても大変協力的であったことは大きかったと思います。

大学院入学のメリット

まず、業務を理論立てて考える機会を得ることができることは、大きなメリットです。つつい目の前の業務に夢中になりがちで、その業務の意義や長い目で見た場合の価値を考える習慣の無かった私にとって、仕事帰りに大学院に寄り授業を受けながら、自分の担当業務や図書館というものを俯瞰する機会が得られたことは大きかったです。

また研究を行うことで、自分の新たなフィールドを深めることができます。不格好ながらも自分なりの研究を行い論文を執筆することで、自分を知ることができますし、今後の課題も見つけることができるのは非常に有意義な経験です。

先生やゼミ生との交流も、とても有り難く楽しい経験でした。研究だけでなく業務の相談に乗っていただいたこともありました。

自分自身が研究や論文執筆等を行い苦心することで、利用者である大学生の学習・研究支援にもより親身になり対応することができるようになったように思います。

最後に

今、仕事をもっと楽しくしたい方、新しい人脈が欲しい方、自分のちからを試したい方・・・そんな皆さんに、私は迷わずこうお勧めします。

「はやく図情においでよ。ね? 楽しいよ。」
(2011年度博士前期課程修了)



▲ 逸村先生と社会人学生の皆さんとともに
左から二番目が筆者

博士前期課程修了 高橋 公海

はじめに

私は現在、企業の研究員として、実世界に埋め込まれたセンサ等を通じて、人間の行動や周囲の状況を把握する技術の研究を行っています。大学院在籍当時はデータ工学の研究室に所属し、分散管理されたWebコンテンツの一貫性維持に関する研究を行っていたため、現在とは扱う分野が少し異なります。ですが、図書館情報メディア研究科で過ごした2年間の間に培った、研究に対する姿勢や幅広い分野の研究に触れた経験は、現在の仕事の基盤として非常に役立っています。大学院生活の中でも授業・研究生生活・人について、紹介したいと思います。

授業

「図書館情報メディア研究科とは一体何を学ぶところなのか?」という質問を、在学中や就職後も時折受けます。多くの方は「図書館」に関連する学問領域のみを想像されるようですが、私は「図書館に様々な分野の本が置いてあるように、幅広く何でも学べるところ」だと思っています。実際に図書館情報メディア研究科がカバーしている研究領域は、非常に多様です。

授業では、情報技術に関する知識や英語など基本的なスキルだけでなく、人文・社会・理工系など複数の領域にまたがる学際的な分野を学ぶことが出来ます。現在取り組んでいる研究も複数の領域に関連しているため、学生時代に基礎を幅広く学び視野を広げ、複眼的な思考を養っていたことが役に立っています。

扱う研究領域が広いということは、当然、自分の専門ではない分野の授業や

研究内容を理解しなくてはいけない機会が多くあり、当初はついていくのに苦労しました。ですが、そういった経験が社会人になってから新しい分野の勉強を始める時など、様々な場面でさらに役に立っています。連携大学院の研究者の方による科目など、本当に幅広い分野の授業が用意されていますので、自分の専門とは少し異なる分野も積極的に学んでみてほしいです。

研究生生活

大学院で最も長い時間を過ごすことになるのが研究室です。週に1回以上は研究室のゼミ、それ以外に他の研究室と合同のゼミなどもあります。また、指導教員とも週1回程度議論を行いながら研究を進めます。頻繁に行われていたゼミでの研究発表や議論を通じて、物事を整理し論理的に考え、それを相手に分かるように伝える能力が養われます。これは就職活動や社会人になってからも非常に役立っています。研究発表や議論は現在も日常的に行っており、特にプレゼンテーションは学生の時にノウハウを学び、場数を踏んでおいて良かったと感じることが少なくありません。

さらに、研究室で一緒に過ごす仲間と、数学の自主勉強会や、トップカンファレンスの論文を分担して読む会も行っていました。ホワイトボードの前でアルゴリズムやプログラミングの相談をしたり、論文締切前には夜遅くまで研究室に残り、一緒に頑張ったことも今では良い思い出です。熱心に指導して頂いた先生と、研究室の仲間が居たからこそ、頑張って乗り切れたことが沢山

ありました。2年間の研究生生活を通じて経験したことは非常に貴重な財産となっており、指導教員と研究室の仲間のおかげで充実した研究生生活を送ることが出来たことに、とても感謝しています。

人

図書館情報メディア研究科は扱う学問領域だけでなく、学生も多種多様です。社会人学生や留学生、起業している人や、独立行政法人情報処理推進機構が公募している「未踏IT人材発掘・育成事業」に応募して頑張っている才能にあふれる人も居ます。直接会って話をすると、自分の考えの狭さと世の中の広さ、価値観の多様さを感じます。筑波大の他の研究科にも良い意味で変わった方が沢山居ますので、積極的に交流してほしいと思います。自分の価値観や視野を広げることで、人生における選択肢が広がったように感じます。

おわりに

本研究科で過ごした2年間は、現在の自分を形成する非常に重要な礎となっていることは間違いありません。これから入学される方にも多くのことを学び、忙しくも充実した研究生生活を過ごしてほしいと思っています。

(2009年度博士前期課程修了)

博士後期課程修了 中野 倫靖

自己紹介

私は現在、主に歌声（音楽）を対象とした情報処理である歌声情報処理を研究しています。デジタル化された音楽コンテンツの普及によって大量の楽曲にアクセスできる現在では、音楽の分析（メタデータの生成）、分類、検索は重要な研究課題であり、図書館情報学と深い関連があります。図書館情報メディア研究科では博士（情報学）の学位を取得し、現在は独立行政法人 産業技術総合研究所の研究者として研究を行っています。

図書館情報メディア研究科の魅力

もしやってみみたい研究があれば、それには「図書館情報学」といえる側面がきっとあります。なぜなら、図書館情報学は学際的な学問であるからで、図書館情報メディア研究科の研究室や授業内容の多様性からも、それが分かるのではと思います。授業や学生同士の交流で得られる知識は多種多様であり、本研究科の魅力の一つです。これをうまく活用できれば、多様な知識背景に基づいた柔軟で独創的な発想の創出に繋がり、 π 型研究者、もしくはより多くの縦線（＝知識）をもった研究者への成長に繋がるのではと感じます。

博士後期課程での研究生生活

博士後期課程では授業が少なく研究の毎日で、他の研究室や他大学の研究ゼミ、学会にも積極的に参加していました。その他、私が在籍していた当時は、研究科の学生のための「院生室」という部屋がありました。それをきっかけの一つとして、図書館情報学の名の元に学生同士が集まり、研究内容を紹介しあ

研究会を自主的に開催したり、食事や遊びも共にしながら、毎日の研究に取り組んでいました。

博士後期課程修了後の研究生生活

博士後期課程修了後の研究生生活では、より「プロであること」、特に「社会への貢献」として「その研究が誰をどう幸せにするのか」を常に意識して研究するようになりました。また産業技術総合研究所も多種多様な研究者で構成されているため、他分野の研究者との交流が刺激になります。さらに、分野を超えた連携によって先進的な技術開発にも取り組むことができ、とても充実しています。

メッセージ

私は「図書館情報学とは本を知り、人を知り、本と人を結びつけることを知る学問である」という言葉に出会った時、本だけでなく人やそれらの関係性を総合的に捉える点に感銘を受けました。これから入学される方には、様々なことを知り、それらを多様に結びつけることを考えて、従来達成できなかった新しい道を図書館情報学の心で切り拓いていくことを期待致します。

（2007年度 博士後期課程修了）

博士前期課程 院生の研究生活

藤川 和也

私は現在、情報探索行動の研究をしています。2年次になると講義のために大学に行く事はほとんどなく、研究室で集中して作業したいときや、先生と打ち合わせやゼミがあるときに大学に行っています。

研究は、毎週行われるゼミで進捗報告とその週にやるべき作業の整理をします。ゼミは毎週3時間程度行い、お互いが抱える疑問点を解消できるように取り組みます。また、定期的に中期目標、長期目標を再確認し、それらの目標に向かってスケジュールの調整を行なっていきます。同時に、研究室内の学部生の指導にもあたっています。

当研究科は情報学という学際的な領域を扱っているため、講義もさまざまなものがあります。学部時代との違いとしては、より能動的な取り組みが要求され、レポートの提出や発表の機会がとても多いです。人前で発表することはこれからにおいても必要になってくると思うの

で、そういった意味ではとても有意義な講義を受けられると言えるでしょう。

院生はほとんどの時間を自由に使えます。もちろん、その時間は研究に使うためにあるものですが、だからといって四六時中研究をしていては息がつまりますし、効率が悪いとも思います。大事なのは自身でしっかりとスケジュールを立て、研究するときはする、遊ぶときは遊ぶと、メリハリをつけた生活を送ることだと思います。

ゼミ

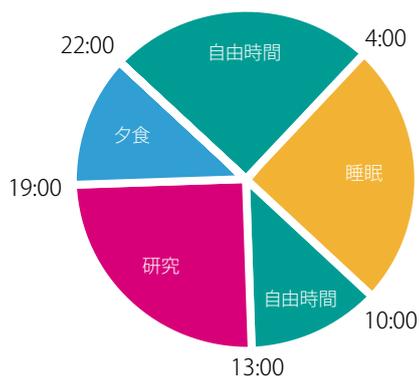
個別ゼミ、研究室合同ゼミがそれぞれ週に一度ずつあります。しっかりと話し合います。

ごはん

週に二度ほど外食やコンビニ弁当でとりますが、ほとんど自炊です。

移動

自転車さえあればどこへでも行けます。ちなみに今の自転車は四台目です。



▲ 藤川さんのタイムテーブル

博士前期課程 院生の研究生生活

池田 光雪

私は、XML 文書に対する問合せ手法をテーマに研究をしています。

研究は基本的には毎週行うゼミで進捗状況を発表し、その場で議論を行うということをペースメーカーにして進めています。また、学会発表や学外の勉強会に広く顔を出すことで、多くの観点からさまざまな意見をいただいています。本研究科でも月に1回以上のペースで研究談話会が開催されており、非常に多岐にわたる分野の研究動向を気軽に聞くことができるため、良い刺激になっています。

授業では、さまざまなテーマについて発表やレポートを通して深く掘り下げて学ぶほか、他分野の院生を相手に自分の研究をわかりやすく紹介する演習も行います。私は、1年次の1～2学期に集中して受講し修了要件となる単位を取り終え、残りの期間を研究に充てました(注:執筆時点では3学期制)。

大学院での生活は、拘束時間ではなくやるべきタスクで予定を立てる機会が非常に多くなります。ですので、必要時間の見積もり能力、モチベーションの維持、体調管理などが学部生の頃に比べ重要な要素となると感じました。私はモチベーションの維持方法として、土曜日だけは必ず遊ぶと決めて生活しています。

ごはん

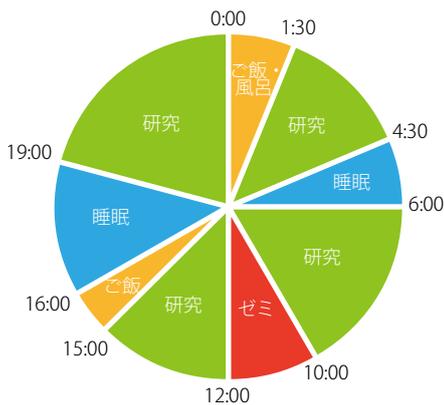
ほとんどは自炊です。歩いて数分の駅前には色々とお店があるため、稀に外食もします。

バイト

TAを毎学期やるほか、不定期でイベント運営などを請け負っています。

移動

どこでも自転車で行きます。



▲ 池田さんのタイムテーブル

教育研究分野

情報メディア社会分野

研究対象

人と情報との関係は多方面にわたっています。【情報メディア社会分野】では、これを三つの点から捉えて、研究対象としていきます。

一つ目の方向は、情報が知識となって変容され、蓄えられ、そしてその中から必要なものを探し出して、新たな情報・知識を生み出していく、そのプロセスや方法を明らかにしていきます。【情報知識・情報資料研究】です。

二つ目の方向は、それら情報・知識が、特色ある文化をもった社会の中で、どのように生かされ、伝えられていったかを探っていきます。【情報文化・情報メディア史研究】です。

三つ目の方向は、情報・知識は、社会の中でどのような制度によって支えられ、どのような政策によって維持し発展して来たか、もしくは今後どのように支え、発展させていくべきなのかを研究します。【情報政策・情報制度研究】です。

人材育成方針

基本は人と情報との関係を、《知識》《文化》《政策・制度》という、三つの点から理解した上で、問題解決、目的達成の方法を的確に考えられる人材を育成することです。具体的には、以下のような人材育成をめざしています。

- (1) 情報を加工して、有益な知識にできる
- (2) 情報を、それが生み出された社会の歴史や文化をふまえて、適切に処理したりすることができる
- (3) 関連する政策・制度を視野に入れて、情報知識を知的財産制度などに的確に位置付けることができる

これらは、人が社会を形成している限り、図書館に限らず、多くの業種・職業で求められている能力であり、それはまた、組織のためばかりでなく、一人一人の人生にも有用な能力と考えられるからです。

(★は2015年3月31日退職予定 *は連携教員)

石井 夏生利 Kaori Ishii

プライバシー、個人情報保護、情報法

プライバシー・個人情報保護法を中心に、情報の取扱いをめぐる法的諸問題を比較法的に研究しています。また、法分野を横断的に捉える観点、新しい動きへの注目、国際的な動向に配慮しつつ、情報法の体系化をめざして研究しています。

▼授業科目

インターネットと法
ドキュメント管理

上保 秀夫 Hideo Jyoho

情報検索、情報探索行動、レファレンスサイエンス

人々の情報行動のうち、特に探索と検索に関して、人間の認知的・情緒的側面の理解を土台にして、知識情報資源にアクセスする新しい手法の提案・開発・評価を行っている。また、情報行動に影響を及ぼす様々な要素をコンテキストという枠組みで研究している。近年は協調作業による情報探索・検索の理解・支援にも興味がある。

▼授業科目

情報探索と検索
Research Methods in
Informatics
情報メディア社会特別研究 I

木暮 啓* Kei Kogure

情報メディアとコミュニケーションの研究
消費者と市場の調査・分析

持続可能な市民社会を形成するために、情報メディアが果たす役割とコミュニケーションのあり方について研究する。ユビキタス社会の将来展望を、情報メディアとコミュニケーションの研究を踏まえて未来学的手法を用いて構想し、その社会的便益を考察する。また消費者、有望市場に関する調査を解説し、事例を分析する。

▼授業科目

情報技術とビジネス
情報メディア・コミュニケーション技術

白井 哲哉 Tetsuya Shirai

日本地方史、歴史資料、アーカイブズ学

16-19世紀日本の地方史と、その基本資料である地誌編さんの歴史について研究している。また、歴史資料の機能・解釈・調査・整理・保存・活用の歴史と方法について研究している。現在は、地域の記録や記憶を将来にわたり保存し、活用するための理論と実践上の課題について、アーカイブズ学や博物館学に学びつつ、総合的に考察しようと考えている。

▼授業科目

デジタルアーカイビング
ドキュメント管理
アーカイブ論
情報メディア社会特別研究 III

後藤 嘉宏 Yoshihiro Goto

社会情報学、コミュニケーション思想史

戦前、映画を議論の中心に据えた独自の美学を構築し、戦後国立国会図書館初代副館長を務めた中井正一の“媒介”論を、社会思想的に研究している。さらにその研究を敷衍して、図書館からマスコミ、電子媒体までを射程に入れたコミュニケーションの基礎理論の構想を目論み、現在そのための理論と実証との兼ね合いを模索中である。

▼授業科目

図書館とメディアの歴史
調査分析法
専門情報・資料研究 III (社会)

呑海 沙織 Saori Donkai

図書館情報学、図書館文化史

図書館の「これから」を考えるための図書館文化史が主たる研究テーマである。歴史的時間軸の中で、図書館が文化的・社会的に、どのように進展してきたのか、また、図書館が取り扱う対象でもある情報メディアが、どのように発展してきたのかについて、知識情報基盤の形成という視点から分析する。

▼授業科目

図書館とメディアの歴史
学術情報基盤論
LIS研究の最新動向

中山 伸一 Shinichi Nakayama

▼授業科目
テキスト解析
情報知識化方法研究

応用情報学
蛋白質や化学物質の構造や性質などからの知識抽出に関する研究、化学や生化学領域などにおける知識の分析研究、小説の読後感など感性データの計測と予測研究、創造技法やデータマイニングなど知識化技法や知識抽出技法の開発と評価研究を行う。

原 淳之 Atsuyuki Hara

図書館情報学, 図書館史
図書館、情報およびメディアの文化的な研究。日本、ドイツ、英国における19世紀以降の図書館や読書行動の変遷についての社会史的研究。具体的には図書館や読書サークルを扱う。また、現代の日本、ドイツ、英国における図書館情報制度、読書行動についての比較研究。

真榮城 哲也 Tetsuya Maeshiro

▼授業科目
システム思考
テキスト解析
Research Methods in Informatics
情報メディア社会特別研究II

知識構造・表現, 情報生物学
様々な対象や現象を要素間の関係性の視点から構造を捉え、それらの持つ特性、関係性の複雑さや表現について研究している。知識と生物を主な対象とする。より具体的には、知識の構造の解析と表現方法や、利用者に適応させる情報提示、遺伝子や蛋白質等の生体分子の複雑な相互作用の解析・予測および高速シミュレーション手法、生物知識を表現し解析に利用する方法についての研究を行っている。

松縄 正登★ Masato Matsunawa

▼授業科目
知的財産の管理と利用
デジタルドキュメントの技術と権利
研究の手引き
知的財産研究

知的財産法
特許法、意匠法、商標法、著作権法および不正競争防止法を中心とした知的財産法制度について、法的問題の考察、法解釈および判例研究などを行っている。特に、特許法については、特許審判、審決取消訴訟等に係る法制度の現状分析、課題と展望について研究を進めている。さらに、最近のデジタル情報技術と知的財産法に係る法的問題について、課題と解決策について考察を行っている。

松本 浩一 Koichi Matsumoto

▼授業科目
資料と文化
専門知識形成研究

中国史, 中国目録学
道教の呪術儀礼、道士と民間宗教者の役割の関係、祠廟信仰などを、主として宋代の文献と台湾の実態調査から解明することをめざしている。同時に研究者の立場に立って、自分たちの用いる資料のデータベース化に取り組み、また中国古典の分類・目録を始め、文献学的研究もテーマとしている。

溝上 智恵子 Mizoue Chieko

▼授業科目
教育政策と情報専門職
国際教育文化政策研究

高等教育政策, 文化政策
主たる研究テーマは高等教育政策と文化政策である。高等教育政策は日本、アメリカおよびカナダの高等教育政策に関して研究を行っている。また、文化政策はカナダとアメリカの文化関連施設の形成や展示物と多文化主義との関連性について、国民文化形成の視点から研究を行っている。

村井 麻衣子 Maiko Murai

▼授業科目
知的財産の管理と利用
デジタルドキュメントの技術と権利
LIS研究の最新動向

知的財産法, 著作権法
知的財産法、特に著作権法についての研究を行っている。インターネットやデジタル技術が発達した現代における著作権法のあり方を検討している。

湯川 朋彦* Tomohiko Yukawa

▼授業科目
情報技術とビジネス
情報化社会研究

情報社会論
情報化あるいはメディアの発展が、人間の行動や社会に与える影響について、歴史、産業、政策という3つの視点から考える。特に産業と政策の関連に注目し、具体的な事例を取り上げて、考察を行う。

横山 幹子 Mikiko Yokoyama

▼授業科目
知識と情報の世界
LIS研究の最新動向

哲学, 知識論
私の研究テーマは、知識の本質や知識を共有する可能性について、分析哲学的な視点から考察することである。たとえば、知識と実在論の関係を考えることや相対主義の諸問題を考えることなどが、このテーマに属している。また、最近では、上記のテーマに関連して、蓄えられた知識の正しさについて考えることにも、非常に興味を持っている。

綿抜 豊昭 Toyoaki Watanuki

▼授業科目
資料と文化
専門情報・資料研究II (文学)

日本文学, 日本図書館学
江戸時代の情報伝達手段の一つは手紙のやりとりであった。その手紙の模範文例集である「往来物」は様々なものが出版された。それには注釈のあるもの、絵入のものなどがある。その「往来物」を中心に、当時の庶民向け書物について、図書館学、画像画などを視野に入れて、人文科学的な観点から研究をしている。

石井研究室

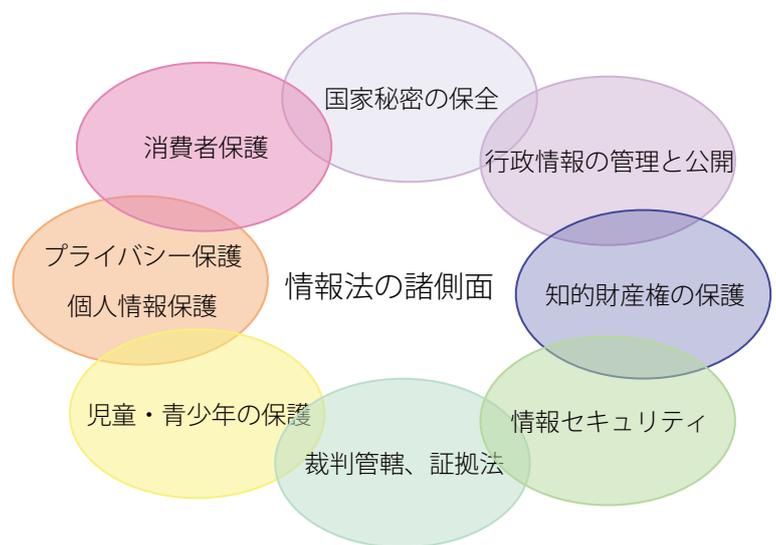
情報と法に関わる諸問題の総合的・多角的な研究

石井研究室では、プライバシー・個人情報保護を中心に、情報と法に関する様々なテーマで研究を行っています。インターネットが当然となった現代社会において、情報の取扱いに関する新たな問題は日々生起しています。例えば、スマートフォンのアプリを用いた個人に関する情報の収集や解析、クラウド・コンピューティングをめぐる様々な法的問題(消費者保護、内部統制、情報セキュリティ等)、書籍の電子化と著作権など、枚挙にいとまがありません。新たな法制度との関連では、2011年の刑法改正によりウイルス作成罪が新設されたほか、国家機密を守るための秘密保全法制、社会保障・税の一体改革とマイナンバー法など、注目すべき法制度が次々と提案されています。石井研究室では、こうした新しい事象を含め、情報にかかわる法的問題を幅広く取り扱っています。

また、図書館に関する法制度や法的問題を研究したい学生さんも受け入れています。最近では、公文書管理法が2011年4月1日に施行されました。この法律は、情報公開法と深い関係を有しますが、それにとどまらず、図書館における情報管理のあり方にも大きな影響が及ぶものと考えられます。

ゼミの学生さんには、自由にテーマ設定をしてもらい、皆で意見交換をしながら研究の方向性を決めています。研究のスタイルは、専ら文献調査です。一つの裁判例に焦点を絞り、判例評釈を分析しつつ判決の妥当性を分析するもの、特定のテーマに関する近時の裁判例の傾向を調査し、判断基準のあり方を考察するもの、法律の規範的解釈論を展開し、法改正の提言を行うもの、先行研究の少ない分野の調査を行い、課題を発見するものなど、アプローチ方法は様々です。テーマによっては、必要に応じてインタビュー調査も行っています。

法学研究を行う際には、既存の議論にとらわれがちになる傾向があります。しかし、石井研究室では、特に新しいテーマに取り組む際には、先行研究を尊重しつつも、新たな発想で問題を考察できる視点を養うことを目指しています。



書誌学的手法を用いた日本文化研究

綿抜研究室での研究は、すでに研究されていないか、先行研究と異なる結果が出せそうであることを前提とします。標準的研究方法は以下の通りです。

- ①情報の収集→日本の文化に関する情報を集めます。
- ②情報の選別→情報を収集する過程で、大まかな仮説をたて、必要な情報を絞り込みます。
- ③情報の整理・分類・数的処理→大まかな仮説のもとに情報を処理します。
- ④情報の特質等の明確化→処理した結果、どのような特質などがあるか、明確にします。
- ⑤仮説の設定→どうしてそのような特質などがあるか、仮説を設定します。
- ⑥仮説の検証→関連する文化情報等をふまえながら、その仮説について検証します。
- ⑦検証結果の知識化→知識化をもって研究成果とします。

一例をあげます。①日本の文化を代表する浮世絵をたくさんみる。②女性を描いたものが多くあり、その女性の着物に着目すると、いろいろな絵柄があり、桜が描かれることが多い気がする(大まかな仮説)。③着物柄に注目して調査し、調査対象とした浮世絵が何点、そのうち女性が描かれたもの何点、着物の絵柄何種類、何柄が何点と数的処理をする。④その結果、桜柄が一番多いことが判明。⑤では何故桜柄が多いのか、その理由を考え、仮説をたてる。⑥関連文献、資料等を調査して検証する。⑦その結果、このような理由で桜柄が多いと結論付け、それを事典の項目になるようにまとめる。

料理書、俳諧書、楽譜といった書籍や雑誌等にみられる文化情報や近江八景に代表される「八景」という文化情報を対象にしている院生もいます。こうした研究を通して、人間社会を見通す能力を身につけてほしいと願っています。



どこが「草紙洗小町」か？

この本は何の本か？

2人の女性の着物の柄は何か？

情報メディアマネジメント分野

研究対象

私たちのまわりには、書籍、雑誌、文書、インターネット上のファイルやデータベースなど、多種多様な情報メディアが溢れています。これらを有効に活用し、利用者の多様なニーズに応えられるようにするためには、さまざまなレベルの管理・運営の仕組みが必要となります。これらの仕組みを「マネジメント」と総称し、本分野では次のような領域において研究を展開しています。

- (1) 個々の情報メディアとその集積に対する分析、評価、組織化、活用を図る領域
- (2) 情報メディアとその集積を核に、研究者や児童など特定のユーザ層に有効なサービスを計画し、構成する領域
- (3) 大量の情報メディアの集積をベースとする図書館や情報センターの組織、経営、制度に関する領域

人材育成方針

専門的な知識・技能を備えた上で管理・運営に携わることができる人材の育成をめざしています。

- (1) 図書館や情報センターの管理・運営を担う人材：図書館等の人材・予算・施設設備を適切に管理し、サービスの質を評価し、新たな計画を策定する
- (2) 情報メディアの収集・組織化・提供を担う人材：データベースの構築や、図書館におけるコレクション構築等に必要の情報メディアを収集・組織化し、利用者の要求に適するかたちで提供するシステムやサービスを構成する
- (3) 情報管理・情報分析を担う人材：企業や官公庁など多様な組織における情報の蓄積・管理を実行し、また情報分析に基づく企画・立案を行う
- (4) 教育・研究・開発に携わる人材：大学等の教育研究機関において、情報メディアとそのマネジメントにかかわる教育・研究・開発を行う。

池内 淳

Atsushi Ikeuchi

▼授業科目

公共図書館
LIS研究の最新動向

図書館情報学

日本の公共図書館政策に関する規範的・実証的研究を行っています。たとえば、1)自治体における公共図書館サービスの最適供給、2)図書館の最適規模、3)現在における図書館の公共性の再定義、などです。

逸村 裕

Hiroshi Isumura

▼授業科目

学術情報基盤論
ライブラリー・ガバナンス論
ライブラリー・ガバナンス研究

学術情報流通論, 学術図書館論, 情報探索行動論

電子情報環境が急速に進展しつつある中、学術情報流通におけるオープンアクセスや機関リポジトリの展開、大学図書館機能の高度化と経営問題そして情報利用者の探索行動に関心がある。関連して図書館及び大学諸活動の認証評価の問題、情報リテラシーの動向、物理的な資料情報源の保存、情報専門職を研究テーマとして扱っている。

岩澤 まり子

Mariko Iwasawa

▼授業科目

情報学特論
情報活用
研究の手引き
データベース資源活用研究

情報組織化, 情報探索

データベース資源の特徴を、情報の蓄積および検索の両面から明らかにし、情報資源としての活用について研究を行っている。具体的には、利用者による情報要求、情報検索の機能、提供する情報、情報の蓄積法等を検討し、医療情報、レファレンス経験および特許情報を用いて、情報提供モデルを提案している。

大澤 文人

Fumito Osawa

教育工学

専攻分野は教育工学で、教育現場におけるコンピュータの利用(コンピュータによる授業支援、教育評価など)と教育機関と企業の連携に関心をもっている。今後はコンピュータを含めたメディアリテラシーについての教育に関しても研究を行いたいと考えている。

大庭 一郎

Ichiro Oba

▼授業科目

図書館経営論

図書館情報学

米国の公共図書館における人的資源管理について、専門的職務と非専門的職務の区分の観点から研究してきた。それらの研究を踏まえて、日本の公共図書館や大学図書館における図書館職員の職務のあり方について研究している。さらに、公共図書館や大学図書館における情報サービスの新たな動向についても研究を進めている。

三波 千穂美

Chihomi Sannami

テクニカルコミュニケーション

目的と対象を考慮した専門情報伝達について研究を行っている。たとえば、マニュアルにおける構成要素とユーザーの関係、テクニカルコミュニケーション能力の分析・再定義、目的と対象を考慮した文書構成方法の試作 などに取り組んでいる。

鈴木 佳苗

Kanae Suzuki

▼授業科目

メディア教育
メディアリテラシー
情報メディアマネジメント
特別研究 II

社会心理学, 教育工学, 社会情報学

メディア使用が児童青少年の発達に及ぼす影響、メディアを用いた教育実践とその効果などに関する研究を行っている。メディアには、図書、インターネット、テレビ、テレビゲームなどが含まれる。メディア使用の影響については、学力的側面と対人的・心理的側面について広く検討している。

田村 肇

Hajime Tamura

▼授業科目

データサイエンス
情報メディアマネジメント
特別研究 I

図書館情報学, 計量経済学

公共図書館の利用(特に貸出し)の量がどのような要因によって決まるのかを計量的な(統計的な)手法で明らかにする研究を行っている。また、それから派生してどのようにすれば図書館の効率性を測定することができるかを明らかにするための研究も行っている。今後は公共図書館に限らず図書館情報学、情報学分野における様々な数理的・計量的分析を行っていきたい。

辻 慶太 Keita Tsuji

▼授業科目

デジタルライブラリ
学習環境の構築
情報分析
情報メディアマネージメント
特別研究Ⅲ

自然言語処理, 図書館情報学教育

現在、次の2つの研究に取り組んでいる。1) 翻訳や文章作成に有効な訳語対、同義語、上位語下位語を Web から自動抽出する手法の開発、2) 電子環境と多様な雇用形態が増えている現代社会での図書館員教育のあり方

歳森 敦 Atsushi Toshimori

▼授業科目

システム思考
LIS研究の最新動向
情報コミュニティ計画研究

行動モデル

コミュニティの知的基盤としての地域公共サービスと地域施設、特に図書館や情報センターを対象として研究する。地域間の格差のような広域的な視点から、施設単体の評価あるいはサービスに対する利用者の選好のような微視的な視点までを総合し、サービスや施設の運営・計画に資する知見を得ることをめざす。

野本 祐二 Yuji Nomoto

▼授業科目

公共経営論

地方行財政制度, 公共経営論

主要な研究テーマは、我が国の地方行財政制度である。特に、市町村合併、地方分権の進展、新しい公共等地方自治体を取り巻く環境の変化は、地方自治の仕組みにどのように変化をもたらしているか、政策評価、指定管理者制度、公会計改革などの比較的最近用いられるようになった制度などに注目しながら研究する。

蘆敬之 Patrick LO

▼授業科目

Introduction to Library
and Information Science

図書館情報学

Comparative studies on school, academic and special libraries in East Asia. Other research interests include (1) Music librarianship; (2) Library outreach and public relations in the digital era (3) Museum-Library collaborations (4) Online resources and relations to language learning under the library setting (5) Christian publishing in China and Hong Kong (6) Comparative studies on education for librarianship

平久江 祐司 Yuji Hirakue

▼授業科目

学校図書館経営
学校メディアセンター運営
研究

図書館情報学, 学校図書館

学校図書館の活動および学校図書館と公共図書館の連携・協力に関する領域について、教育学的側面から研究を行っている。具体的な研究テーマとしては、主として日本および米国の学校図書館の支援システム、学校図書館活動の評価、情報リテラシー教育、利用者への情報提供などがあげられる。

松林 麻実子 Mamiko Matsubayashi

▼授業科目

情報行動論
学術コミュニケーション論

情報行動論, メディア分析

研究活動における主たる関心は、社会情報学的な観点から情報を利用する人間について考えることにあり、具体的には二種類のアプローチを採用している。ひとつは、人間が日常的に行っている情報行動は彼らにとってどのような意味を持つのかという疑問についてフィールドワークを使って解明することである。もうひとつは、人間と情報とが関わる際に必ず存在するメディアに焦点を当て、その構造と情報行動との関わりを解明することである。

水嶋 英治 Eiji Mizushima

▼授業科目

情報メディア組織化
デジタルアーカイビング
情報メディア組織化研究

博物館学・博物館情報学, デジタルアーカイブ

文化財の多くを占める博物館資料・コレクション・歴史的建築物および文書館・図書館の情報資料等を対象として、文化遺産への理解、文化情報資源の記述の方法と視覚化、歴史的文脈における文化遺産の記述詳細、その基礎となる分類方法論、用語研究、デジタルアーカイブにおける知識資源の組織化、文化財電子目録を中心的なテーマとして研究している。

緑川 信之 Nobuyuki Midorikawa

▼授業科目

知識と情報の世界
情報活用
研究の手引き
情報分析研究

図書館情報学

分類理論の研究を行っている。これまでは、図書を書架に配架するための分類(書架分類)を中心に研究が行われてきているが、これは一次元的な配列しか考慮に入れていない。しかし、電子資料などは必ずしも一次的に配列される必要はない。こうした点をふまえ、従来の図書館分類法の構造等を明らかにするとともに、より一般的な観点から目的に応じた分類法のあり方を研究する。

毛利 るみ子 Rumiko Mohri

▼授業科目

公共サービス論
公共図書館
ライブラリー・ガバナンス論

公共図書館政策

生涯学習・社会教育領域を中心とした公共サービスに関する国の制度や教育委員会制度の現状等を踏まえ、国・地方公共団体による図書館政策の課題や今後求められる取組などについて研究を進めていきたい。

芳鐘 冬樹 Fuyuki Yoshikane

▼授業科目

インフォメトリクス
情報分析
情報メディアマネージメント
特別研究Ⅳ

計量書誌学, 計量情報学

ビブリオメトリクスに基づく学術コミュニケーションの分析と、自然言語処理技術を応用した知的情報検索システムの構築に関する研究を行っている。現在の主たる研究関心は、1) 共同研究ネットワークと研究者の生産性との関連、および、2) 専門用語の異形認識を応用した、シラバスの検索・分類手法の開発である。

吉田 右子 Yuko Yoshida

▼授業科目

文化的多様性と図書館情報サービス
情報メディアサービス研究

図書館情報学

主たる研究テーマ:(1)生涯学習の場としての北欧公共図書館の機能に関わる実証的研究、(2)アメリカ公共図書館の理念および実践にかかわる歴史的研究、(3)日本における地域住民と公共図書館の関係性にかかわる理論的研究

三森 弘 Hiroshi Mitsumori

建築学, 学習空間デザイン

これまでの地域コミュニティの醸成場所である京都の路地景観の保全・創出のための制度手法に関する研究を行ってきた。今後はこれに加え、図書館・学校施設をはじめとする生涯学習の場の形成を都市環境の充実という視点から捉え、歴史的価値・景観を尊重した施設整備、既存建物ストックの活用、地域との連携という3つの側面から研究を進めていく。

池内研究室

公立図書館政策に関する定量的研究

概要

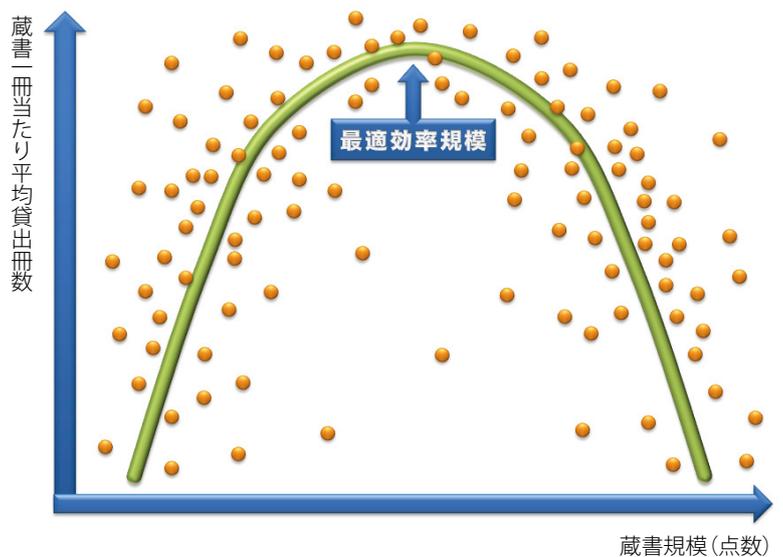
現在、日本には、約1,700の自治体が存在し、3,000以上の公立図書館 (Public Library) が設置・運営されていますが、図書館はそれぞれ、量的にも質的にも様々に異なっています。自治体を取り巻く環境の変化と情報メディアの多様化の中で、図書館をどれだけ設置し、どのように運営することが、社会的厚生という観点から、より望ましいのかについて、種々の定量的研究を行っています。

公立図書館の最小効率規模に関する実証的研究

一般に、図書館や書店は大きければ大きいほど良いと考えられていますが、財政的制約、あるいは、効率性という観点からは必ずしも支持されません。これは自治体の人口規模についても同様のことが言えますが、一定の水準までは「規模の経済 (スケールメリット)」がはたらいて効率的になるものの、ある水準を超えると、再び非効率になっていく現象がしばしば認められます。そこで、図書館の効率性を代表する様々な指標を用いて、図書館の最適な規模を定義しました。

公立図書館の費用便益分析

自治体が図書館を設置すべきか否かの意志決定は、本来、図書館が存在し、それを利用することによって得られる住民の便益 (利益) が、その図書館を設置・運営するための費用 (初期投資+運営費用) よりも大きいかどうかを予測することによってなされることが望ましいのですが、図書館は基本的に無料で利用できますので、住民がどのくらいの便益を得ているのかを測定することが困難です。一方、市場で取引されない (価格を持たない) が希少価値のあるもの (非市場財) は数多くあります。例えば、環境資源、公衆衛生、家庭内での教育、ボランティア活動などです。そういった非市場財の価値を測定するための手法を公立図書館サービスに適用して、公立図書館の便益を測定しました。



公立図書館における借覧と来館に対する支払い意志額

	S図書館		Y図書館	
	借覧	入館	借覧	入館
有効回答数	670	683	862	876
平均値	¥127	¥127	¥82	¥107
最頻値	¥100	¥100	¥50	¥100
最大値	¥5,000	¥5,000	¥5,000	¥3,000
最小値	¥0	¥0	¥0	¥0

学術情報基盤としての大学図書館に関する研究

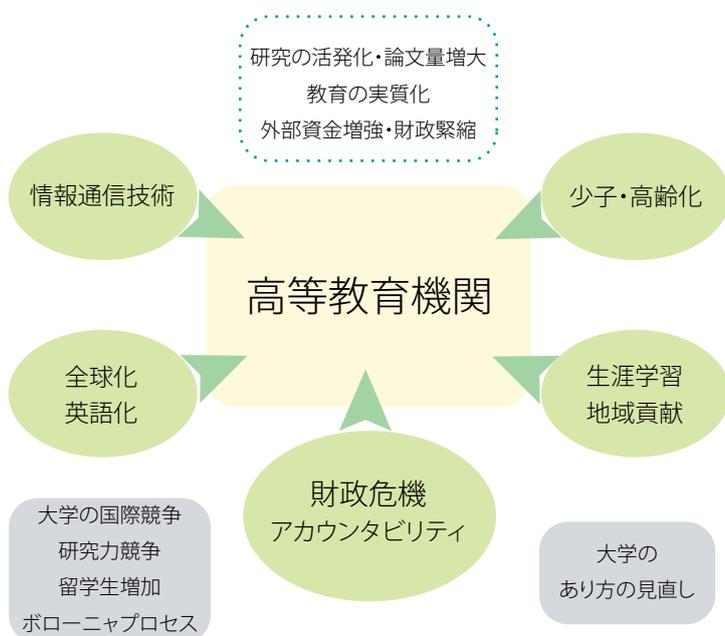
逸村研究室では大学図書館、情報環境と高等教育機関に関わる情報活動を対象に研究活動を行っています。電子情報環境が急速に進展し、高等教育機関が左記に見られるような多様な環境の変化におかれている今日、様々な活動を支援するために大学図書館及び学術情報基盤は幅広い活動が求められています。

大学図書館の学習・研究支援、社会貢献

今日の情報環境下において、大学図書館は「館」に閉じこもったサービスだけではその目的を達成することはできません。ポローニャプロセスに代表される国際的な高等教育状況の変貌にどう対応するか、電子ジャーナルや電子ブックをどのようにサービスに取り入れるか、機関リポジトリ構築を通じて大学のアカウンタビリティをどう高めるか、利用者の情報利用行動に対応した効果的なサービスの提供、これらはどれも現代大学図書館の課題です。さらにシリアルズクライシス、オープンアクセスといった学術情報流通の課題に対応することが求められています。

現在の研究課題

オープンアクセス運動と機関リポジトリの展開とその利用実態、ラーニングコモンズに関わる運営と評価指標、大学図書館機能の高度化と経営問題、そして情報利用者の探索行動等をテーマに研究を進めています。関連して図書館及び大学諸活動評価の問題、情報リテラシーの動向、物理的な資料情報源の保存、情報専門職の問題を研究課題としています。



鈴木佳苗研究室

メディア使用・メディア教育の影響に関する研究

家庭や学校へのメディア普及が進み、私たちは多くの時間をさまざまなメディアとともに過ごしています。このようなメディア使用は私たちにどのような影響を与えているのでしょうか？

鈴木佳苗研究室では、この身近な問いの答えを探求しています。また、メディア教育の効果についても検討しています。

研究紹介1:メディア使用の影響(1)

読み聞かせや読書が子どもたちの発達に及ぼす長期的な影響を検討しています。幼児を対象とした調査では、絵本の種類によって想像力や物語理解への影響が異なることなどが示されました。また、小・中学生を対象とした調査では、読む本の種類によって共感性や学習意欲への影響が異なることなどが示されました。

研究紹介2:メディア使用の影響(2)

テレビの視聴、テレビゲームやインターネットの使用が子どもたちの発達に及ぼす長期的な影響を検討しています。一般的にテレビ番組の暴力描写の視聴は子どもたちの発達に悪い影響を及ぼすと考えられていますが、小・中学生の女子では、テレビの暴力描写の内容によって攻撃性が低下する場合があります。図1は、攻撃性の一部の低下を現しています。

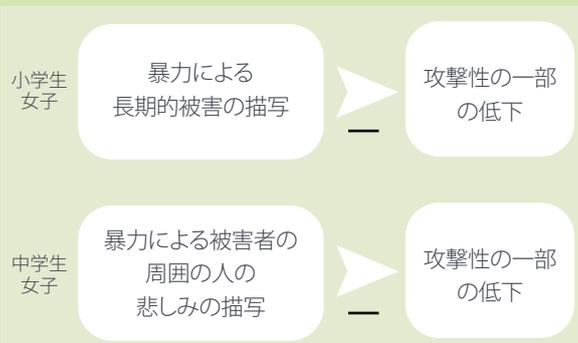


図1 小・中学生におけるテレビ番組の暴力描写の視聴内容が攻撃性に及ぼす影響(図の中の「—」は、攻撃性の一部の低下を現しています)

研究紹介3:メディア教育の効果

学校や公共図書館において、メディアを読み解く力を高めるためのプログラム、ものづくりを体験するプログラムなどを考えて実践し、その効果について検討しています。

現在は、インターネット上の対人問題の解決や予防に役立つ教材の開発を行っています(最先端・次世代研究開発支援プログラム)。

メディアの影響研究、メディア教育研究の展開

このように、メディア使用が子どもたちの発達に及ぼす影響には、よい影響や悪い影響が見られる場合も、影響が見られない場合もあります。今後は、メディアの影響研究を進めるとともに、メディアの影響研究の結果を参考にして、メディアの悪影響をできるかぎり低減し、よい影響を高めることができる新しいプログラムを考えて実践し、その効果を検討していきたいと考えています。



ゼミ室の様子



情報メディアシステム分野

研究対象

現代社会における知識共有にはコンピュータとネットワーク技術が欠かせません。今日もまた人々はPCや携帯電話などの情報機器を操作し、ネットワークにアクセスします。このような行動を当たり前にしたのは、多くの情報通信技術を開発し、社会基盤として整備した先人たちの努力です。情報メディアシステム分野は、先人たちの努力を引き継ぎ、さらなる高みをめざします。

われわれが研究対象とするのは「知識共有基盤」です。技術を人の意識や社会的行動と結合させ、そこに作用する技術世界を対象とします。

大規模データを収集し、相互に関連付けられた構造化文書として蓄積します。そこに人のコミュニケーションや意味理解を考慮して、新しい情報アクセス技術を開発します。蓄積された構造化文書はやがて、新しいアクセス技術とともに共有可能な知識資源となり、デジタルライブラリのような知識サービスを形成します。このように、単なる技術開発にとどまらないところが他の技術系の大学院と違う点です。

人材育成方針

まず意識しているのは、学会発表や国際会議、学術雑誌への投稿を積極的に推奨しているところです。研究室だけで議論していると、視点が偏り、都合のよい結論を導きがちです。外で発表を行い、他流試合を行うことで、自らの研究を客観的に眺められるようになります。また、外部の批判を意識することで、研究室の議論もより真剣に行うようになります。その結果、常に最先端のレベルを維持できます。

もうひとつ意識していることは、図書館情報メディア研究における技術とは何かを考えることです。とかく研究は近視眼的になりがちです。自分の研究に没頭するだけでなく、そのテーマが何のためにあるのか、その位置づけはどこにあるのかを合わせて考える必要があります。博士後期課程ではもちろんのこと、博士前期課程においても自らの研究がその領域を定義づけ、発展させることを意識するべきです。図書館情報メディア研究というオリジナリティあふれる領域を意識することで、自らの研究も輝くのです。

宇陀 則彦
Norihiko Uda

情報資源管理, 電子図書館

- 1) 学術情報リンク: 知的生産に必要な学術情報をリンクし、最適なパスを提供する。
- 2) 情報資源共有: 図書館、博物館、文書館などの情報資源を透過的に利用できるようにする。
- 3) 資料研究支援: コンテンツを再構成することによって資料の新たな側面を引き出す。

▼授業科目

システム思考
デジタルライブラリ
情報メディアシステム特別研究 II

佐藤 哲司
Tetsuji Satoh

情報アクセス論, データ工学

情報ネットワーク時代の本格的な到来を迎えて、相互に関連づけられた情報空間の構造を知識として表現し、変換・統合・共有・アクセスするための情報アクセス高度化、知識写像に関する研究を進める。情報を発信する著者コミュニティの変遷・変容にも興味があり、データ工学や情報検索などの工学的アプローチによって解明する。

▼授業科目

データ工学特論
LIS研究の最新動向
情報アクセスシステム研究

阪口 哲男
Tetsuo Sakaguchi

情報科学

- 1) デジタル図書館基盤技術: デジタル図書館の構築やサービスの展開に適応した基盤技術の開発;
- 2) 分散型情報システムとその開発環境: WANやLANに分散した情報の特性に基づくシステム構成方式とその開発;
- 3) 知的活動のための情報基盤: 研究・教育における情報の蓄積・加工・利用のための手軽なソフトウェア環境の構築

▼授業科目

セマンティックウェブ
デジタルアーカイビング
デジタルドキュメントの技術と権利
情報メディアシステム特別研究 I

鎮目 浩輔
Kosuke Shizume

量子計算, 統計的機械学習

量子計算: 微視的な物体は「量子力学的な性質」を持ち、うまく利用したアルゴリズムを見つけられれば通常の計算機よりも本質的に速い計算が原理的に可能であることが知られている。それを主に幾何と最適化の手法を利用して探す研究を行っている。
統計的機械学習: 特にガウシアンプロセスを用いた回帰とその応用。

▼授業科目

アルゴリズム特論
情報物理研究

鈴木 伸崇

Suzuki Nobutaka

▼授業科目

問題記述と形式化
情報表現法
情報メディアシステム特別
研究Ⅲ

構造化文書, データベース

XML等の構造化文書に関する研究を行っている。たとえば、スキーマ進化に伴うXML変換アルゴリズムの開発、XPath充足可能性問題を解くための効率のよいアルゴリズムの開発を行っている。また、それら問題の計算複雑さについても考察している。

関洋平

Yohei Seki

▼授業科目

自然言語処理
情報分析

自然言語処理, 情報アクセス技術

書き起こされたテキストに現れる, 人対人のコミュニケーション過程の理解を目指している。その基礎技術として, 意見分析, 要約, 多言語処理に力を入れている。最近では, 現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)を対象とした意見・体験情報の詳細アノテーションや, 言語または文書ジャンルを横断した情報アクセス技術の開発に取り組んでいる。

高久 雅生

Masao Takaku

▼授業科目

デジタルドキュメント
情報メディアシステム特別
研究Ⅳ

情報科学, 電子図書館, 情報検索

Webや計算機を活用して知的情報検索を行うこと, 知識情報を活用した情報統合全般に関心がある。デジタルドキュメントの作成, 流通, 管理, 提供の過程における効果的なドキュメント管理手法の研究に加え, 利用者がどのようにドキュメントを探索し活用するかを実証的に明らかにする研究に取り組んでいる。

手塚 太郎

Taro Teduka

▼授業科目

要求分析とプロジェクト管理

情報検索, 統計的言語モデル

情報検索システムを高度化させるために, 言語の意味構造を確率モデルとして表現し, 大量の文書集合から学習させる手法の研究を行っている。画像・空間情報・時系列データなど, 多様な非記号的情報が急速に増加を続けているが, それらと言語的・記号的情報を横断した検索システムの構築に取り組んでいる。

時井 真紀

Maki Tokii

▼授業科目

データサイエンス
情報表現法

計算物理

磁性材料の理論計算の研究を行っている。1) 強磁性金属, 酸化物の電子状態の計算; 2) 理論計算から得られた結果の可視化

長谷川 秀彦

Hidehiko Hasegawa

▼授業科目

データサイエンス
数値処理研究

ハイパフォーマンスコンピューティング, 数値線形代数

1) 数値線形代数: 科学技術計算に現れる大規模な疎行列に対する連立一次方程式の解法や固有値計算のアルゴリズムの開発・評価; 2) ハイパフォーマンスコンピューティング: 並列コンピュータやインターネット上で手軽に利用できる高速な数値計算ソフトウェアの開発とその性能評価; 3) 数値計算ソフトウェアの応用: たとえばコンピュータ教材の作成やデータマイニング

松村 敦

Atsushi Matsumura

▼授業科目

情報表現法
デジタルドキュメント

情報学

大量の情報を前に人間がいかにして情報と付き合っていくべきかに興味を持っている。この問題に対して, Web, 文献, 絵本など様々な対象から知識を抽出し組織化する手法と, 回答が欲しい, じっくり学習したい, 盛り上がるお話をしたい等, 人がどんな状況で何を必要としているかの情報要求の分析という二つの側面からアプローチする。

松本 紳

Makoto Matsumoto

▼授業科目

画像・映像メディア処理
メディア物理研究

計算物理, 計算機実験

物性物理の理論的研究とそれに関連するバンド計算システム等の開発を行う。具体的には以下のとおりである。1) 磁性媒体材料等に対する計算機実験; 2) 理論あるいは実験結果等の可視化のためのシステム開発; 3) 陽電子消滅角相関やコンプトンプロフィールの理論的研究

森継 修一

Shuichi Moritsugu

▼授業科目

アルゴリズム特論
数式処理システム研究

情報科学

情報システムのひとつとしての数式処理システムの機能を高度化するため, 基本となるアルゴリズムの研究を行なう。自然科学の立場から, 数学的な基礎理論に基づいて計算のメカニズムを明らかにすることにより, さらに効率のよいアルゴリズムの開発をめざすとともに, 実際のプログラム開発と実験的検証までを行なう。

若林 啓

Kei Wakabayashi

▼授業科目

自然言語処理

機械学習, データマイニング

分散コンピューティング技術を用いて大規模に蓄積されたデータを解析し, パターン認識や知識抽出を行う機械学習技術の研究を行っている。特に, 系列情報の特性を捉える高度な確率モデルの学習手法の開発を行っており, その応用として自然言語の文構造の統計的教師無し学習, エージェントの階層的行動プランニングなどの研究に取り組んでいる。

佐藤・関グループ

人と情報をつなぐ情報アクセス技術の研究

コンテンツ工学領域の開拓

ウェブやブログ、ツイッターなど新しいメディアの登場は、情報共有のパラダイムを大きく変容させています。私たちの研究室では、日常生活の様々な局面で生成される知識や情報をマイクロコンテンツとして捉え、コンテンツ間のネットワーク(関係性)を編纂、流通・利用する情報共有プロセスの核となる情報アクセス技術と、人とコンテンツの相互作用(インタラクション)の高度化に取り組んでいます。



ソーシャル・インタラクション

ソーシャルメディアに現れる人と人とのインタラクションを促進するための研究を進めています。具体的には、SNS全般におけるコミュニケーション支援を目的とした顔文字の推薦、イラスト共有SNSにおけるイラストレータ検索の実現による人材発掘支援、読書感想の共有を目的とした新たなサービスの提案など、ソーシャル・メディアの特徴に着目した多様な研究に取り組んでいます。



コミュニケーション理解

実社会での言語の使われ方を意識し、コミュニケーションの支援や、情報の分析・発見といった応用につなげることを目標として、研究を進めています。具体的には、人のプロフィールを推定し人をつなぐ研究や、用例を利用した機械翻訳、対話システムへの応用を目的とした言語行為コーパスの作成、マイクロブログにおけるトピック分析、不快な表現の検出に取り組んでいます。



<http://cu.slis.tsukuba.ac.jp>

知識コンバージョン

生活者が自ら発信する多様な情報から私たちの生活に役立つ知識の抽出法、抽出した知識を収斂・収束して新たな知識とする知識コンバージョン法を研究しています。

膨大なツイートをトピックモデル(LDA)を用いてクラスタリングした後に、食事や交通などの生活の局面にマッピングする2段階分類法を考案し、生活局面に応じた情報提示をするポットシステムを開発しています。また、質問回答サイトに蓄積された質問記事を対象に、時系列トピックモデルを用いて、話題の抽出と話題の経時的な変化を検出し、季節性のある情報要求に対するクエリ拡張を高次化する新たなウェブ検索手法も提案しています。



ソーシャルキャピタル

生活の中で生成・共有されるブログや質問回答サイトなどは、膨大な数の参加者で形成されています。コミュニティに参加する個人の役割や貢献度を、HitsやPageRank等のアルゴリズムを駆使して解明する、ソーシャルキャピタルの形成過程を明らかにする研究をしています。質問回答サイトで率先して回答する参加者の比率は時間経過と共に一定値に収束することや、回答者の連鎖から求めたスコア(QARank値)でコミュニティを性格付ける方法など、コミュニティの発展過程の解明、賑わい感や活性度を向上する方法など、コミュニティの健全な成長につながる成果が出ています。

<http://ce.slis.tsukuba.ac.jp>

明日の私を作るシステム - Mission, Passion, Revolution!!

宇陀・松村グループ

社会には膨大な量の情報が存在します。私たちはその中から人々が求める情報を簡単に入手し、便利に楽しく活用できるよう、様々なアプローチから研究を進めています。システムの開発はもちろんのこと、ユーザ評価や分析も積極的に行い、人がよりよく生きる社会のサービスの実現を目指しています。さらに、私たちの

活動は研究室内だけに留まりません。学園祭では附属図書館と共同で“近未来書籍Lab.”を実施し、研究成果を社会に還元するための新しい表現方法を追求しました。このように私たちは常に新しいことにチャレンジし、未来を創造しています。詳しくは公式Webサイト (<http://niccoli.slis.tsukuba.ac.jp/>) をご覧ください。

Library - 図書館をよりよい場所へ

学術情報と人をつなぐためのシステム基盤の構築や、図書館内やOPACにおけるユーザ行動の調査・分析を行なっています。また、アンケートやインタビューによる図書館員への調査も行なっています。

検索結果と物理配置を結合するディスカバリーインタフェース



ARを用いた出会い系図書館の運用実験

Interface - 情報を魅力的に

情報を分かりやすく、魅力的に見せるためのインターフェースについて研究しています。検索履歴の可視化やWeb上に存在する情報をまとめる方法について検討し、システムとユーザとのより良いインタラクションを追求しています。



Twitterのつぶやきを二次的にまとめるシステム

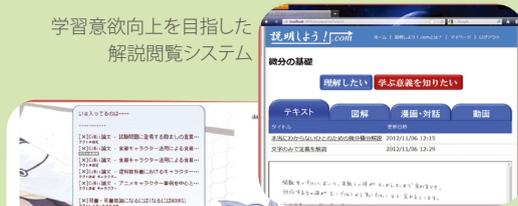


Web探索の過程が見える履歴可視化インターフェース

Education - 学習支援を目指して

効果的に知識を発見・蓄積できるような学習環境の構築を目指しています。学習意欲が向上するようなシステムや、新たな学習課題を導き出すことを支援するシステム、更に指導者を支援するシステムの開発を行っています。

学習意欲向上を目指した解説閲覧システム



キャラクターを活用した学習継続支援ツール

Social - つながりをつくる

人と人とのつながりをつくり、それを活用することで、機械的な処理だけでは実現できない新たな価値を創出します。これまで、読書コミュニティの創出や親子のコミュニケーションの促進を指向したシステムを開発してきました。



子どもの質問に着目したソーシャル絵本推薦システム

読書コミュニティを育てるユーザ推薦技術の開発



鈴木伸崇研究室

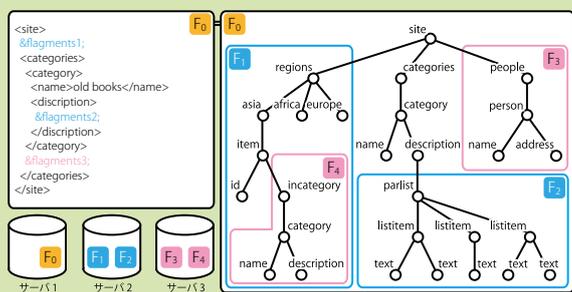
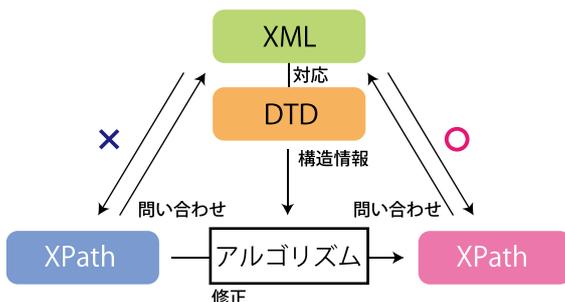
Web上のデータと構造化文書に関する研究

Web上では大量のデータが生成・蓄積され続けています。データの構造も複雑化しているため、これまでの手法では、このような大量かつ複雑なデータを効率よく管理したり必要な情報を取得したりす

ることが難しくなっています。当研究室では、Web上の標準的なデータ形式であるXMLやHTMLについて、それらデータに対する新しい管理・問合せ手法やユーザ支援などについて研究を行なっています。

誤った問合せ式の自動修正

データに問合せをする際「問合せ式を書いて実行してみたものの、期待した実行結果が得られずどう修正していいかわからなかった」というご経験はないでしょうか。当研究室では、XMLの標準的な問合せ言語であるXPathを対象に、XMLの構造に沿わないXPath式を正しい式に自動修正するアルゴリズムを開発しています。構造的に正しいXPath式は通常複数存在するので、ユーザの記述した式に近いものから順にユーザに提示し、希望の式を選択できるようにして利便性を高めています。



分散XML

1つの組織が地理的に離れた複数の部署をもち、それぞれの部署が並行してデータの管理を行うことは珍しくありません。このような背景から、XMLデータを複数の断片に分割し、複数のサーバに分散させて(例えば複数の部署ごとに)格納・管理する技術が研究されています。このようなXMLデータの配置形態は分散XMLと呼ばれています。しかし、分散XMLに対して従来の問合せ手法や変換手法をそのまま適用すると、動作効率が大きく悪化してしまうことが分かっています。そこで当研究室では、分散XMLに対する効率の良い問合せ手法や変換手法、特にXSLT変換手法について研究を進めています。

その他

上記のほか、XPath式充足可能性問題などの基礎理論系のテーマから、XMLのスキーマ進化、HTML5を用いたiPadアプリの開発まで、XMLやHTMLに関する研究を幅広く行なっています。

当研究室のWebページは <http://nslab.slis.tsukuba.ac.jp/> です。ご出身の分野を問わず、意欲のある方のご参加を歓迎いたします。



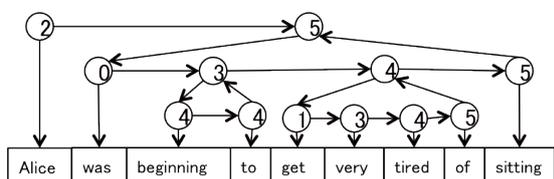
手塚・若林グループ データからの知識獲得

電子書籍やデジタルライブラリ、ウェブ上のコンテンツなど、電子的な文書の蓄積が急速に進んでいます。これらのデータを人間が読むのではなく、計算機に読み込ませ、知識を獲得させることで、情報検索や情報推薦など、幅広い応用が可能になります。適切な知識獲得のためには計算機が言葉の「意味」

統計的言語モデル

計算機が文書から知識を獲得するというのは、与えられたデータのすべてを記憶するのではなく、内容を要約し、全体の傾向を簡潔にまとめた構造として捉えるということです。統計的言語モデルではこの構造を確率的なものと捉え、文書における単語の出現が従う離散的な確率分布のパラメータを機械学習によって推定します。

モデルにはデータとして観測されない潜在的な「意味」を表す変数を加えることもできます。より人間の認知に近い意味を獲得するような、高度な機械学習の研究に取り組んでいます。



意味を考慮した画像検索

従来の画像検索システムでは色彩や形状の類似に基づいて検索を行っていましたが、「何が映っているか」という意味を統計的な手法で推定した上で検索を行うことで、より精度の高い検索システムを目指す研究を行っています。



を理解しなくてはなりません。データ自体を利用して意味を学習させる統計的言語モデルという手法を使い、データから知識を取得するシステムを構築する研究を行っています。

ライフログ検索システム

日常会話には時折大変面白い話題が出ることがありますが、記録を取っていないと忘れてしまいます。残念な思いをしないで済むように、会話の内容を記録し、後から再利用できるようにするシステムを開発しています。実用的な検索機能を実現するには音声認識の精度向上が必要です。統計的言語モデルを用い、音声認識エンジンに単語間の意味的距離を計算させ、音韻的には似ているが意味的には関連性が薄い認識結果を検出し、修正させる形で改善を図っています。



ローカル情報検索

特定の空間領域を対象としてウェブ検索を行う地域情報検索(ローカル検索)のシステムが近年、大きな注目を集めています。ユーザが入力したクエリに特に関連が深い地域を提示するなど、新たな形での地域情報検索システムを開発しています。



情報メディア開発分野

研究対象

ネットワーク情報化社会の進展によって、私たちは非常に多くの情報を、多様な形態で発信し、流通させ、利用するようになりました。情報メディア開発分野では、さまざまな情報メディアを利用してネットワーク情報環境をより先進的なものとし、私たちの生活をより豊かなものにするを目的とした研究を進めています。本分野では、各種メディアを利用した情報表現技術と表現物の制作方法に関する領域、各種メディアを介した人間とシステムのインタラクションに関する領域、人間の視覚や認知に関する認知心理学領域、音楽や音声、画像などをコンピュータで分析・認識する認知科学領域、ネットワークメディアを利用したサービス創出に関する領域、ネットワーク上での効率的な情報流通、管理、利用に関する領域など、多様な研究領域をカバーしています。

人材育成方針

情報メディア開発分野では、個々の学問分野での研究を進展させると共に、それらを学際的、統合的に学べる環境を提供しています。研究室は概ね数人程度の少人数構成ですので、指導教員の元で、専門分野における深い知識と研究遂行能力を身につけると共に、問題発見能力・問題解決能力など将来にわたるスキルを習得できます。進化した情報化社会で十分に役立つ先端知識や技術を身につけることは、大学学部レベルの4年間だけではなかなか困難です。大学院では、先進技術を深く理解し、自らの研究テーマとして進展させる能力を習得した、情報化社会の将来を担う人材を育成します。

(★は2015年3月31日退職予定 *は連携教員)

井上 智雄 Tomoo Inoue

ヒューマンコンピュータインタラクション, 教育工学

コンピュータやセンサがどこにでもある高度情報環境において、人と人とのコミュニケーションや協同の仕組みに基づいたインタラクティブシステムを設計開発し、これからのインタラクションを創出している。またその過程で生み出されたり利用されたりするデジタルコンテンツもあつかう。食事や学習といった日常生活を主な対象に研究を進めている。

▼授業科目

ヒューマンコンピュータ・インタラクション
情報メディア開発特別研究 I

川原崎 雅敏 Masatoshi Kawarazaki

情報通信ネットワーク

実社会と仮想社会を融合する新たな環境を構築するユビキタスネットワークを対象に、社会に役立つ研究をめざしています。1) Mobile-Health: 在宅医療支援システム、2) ネットワーク連携型クラスターコンピューティング方式、3) トラヒック変動に適應する迂回パス設定制御方式、等の研究を行っています。

▼授業科目

ユビキタスコンピューティング
ネットワークコミュニケーション
基盤研究

小川 恵司* Keiji Ogawa

情報表現技術

出版系の事業領域において組版処理を中心としたCTS (Computerized Typesetting System) 全般の技術開発に従事。現在は総合研究所においてEビジネス領域の研究開発を担当しており、主に次世代情報端末などを対象としたテキスト系の表現技術の研究開発を行なっている。

▼授業科目

メディア技術特論
情報表現システム技術開発研究

金 尚泰 Kim Sangtae

芸術・デザイン学、コンテンツ制作

コンテンツ開発に必要なとされるデザイン表現・CG関連先端テクノロジーの応用に関する研究。企画・制作のための造形表現やデザインのあり方を探求する。コンテンツとしての表現可能性を広げることを主な研究テーマとし、ダイナミックでインタラクティブな情報表現について、表現理論・技術などを芸術・デザインの観点に基づいて制作する。

▼授業科目

情報デザイン
情報メディア開発特別研究 III

小高 和己★ Kazumi Odaka

パターン認識, 文字認識

文字・画像の機械によるパターン認識技術の諸プロセスを研究の対象としている。人間が文字を発生する過程を各種センサを用いて直接計測し手書き文字に内在する変形・個性の構造を明らかにすること、複雑な背景中にある文字や図形等を分離する際の文字構造の利用法等について研究している。

▼授業科目

画像・映像メディア処理
パターン認識研究

杉本 重雄 Shigeo Sugimoto

デジタルライブラリ, デジタルアーカイブ

ネットワーク時代における知識と情報の共有基盤として重要な役割を持つデジタルライブラリに関心を持つ。その中でも、特にメタデータに関して関心を持ち、XML等のWWWの基盤技術を利用したメタデータのためのシステムの構成方式や、デジタルライブラリやインターネット上でのメタデータ応用システムの研究を進めている。

▼授業科目

メタデータ
コンテンツ流通基盤技術研究

加茂 竜一* Ryuichi Kamo

デジタルアーカイブとメディア表現

高度な画像処理技術によるVR表現技術など、将来の様々なメディア表現手法やデバイスに高品質に応用しうるデジタルアーカイブを、コンテンツ表現の視点から考察。素材となる作品が持つ広範な情報を、適切なメディアによって保存・公開するための手法を、実践の蓄積をもとに研究を進めている。

▼授業科目

メディア技術特論
画像情報表現メディア応用
基盤研究

鈴木 誠一郎★
Seichiro Suzuki

▼授業科目
コンテンツ制作論

コンテンツ・プロデュース論, 映像・音声における表現
放送、通信という媒体は問わずとも、いまやコンテンツ制作はあらゆるジャンルのテクノロジーを組み合わせて、メッセージを世に問うツールとして不可欠なものになっている。そうした状況を踏まえた上で、主として放送メディアを中心とした映像表現の研究、開発を行なう。またコンテンツ開発における発想法の一つとして、絵画、音楽、パフォーマンスアートといった芸術のメディアからの援用に関する研究も行なう。

中井 央
Hisashi Nakai

▼授業科目
問題記述と形式化
LIS研究の最新動向

コンパイラ構成法, プログラミング
近年、様々な要求に対応するために、新たなプログラミング言語を開発することはめずらしくない。また、携帯電話やゲーム機など、汎用のコンピュータ以外のためのプログラミングの要求も大きい。このため、プログラミング言語およびそのコンパイラの構成法について研究を行なっている。

永森 光晴
Mitsuharu Nagamori

▼授業科目
セマンティックウェブ

デジタルライブラリ, セマンティックウェブ
デジタル図書館に関する研究を行っている。具体的には、メタデータの相互利用性や長期保存性を高めることを目的としたメタデータスキーマレジストリの研究や、メタデータスキーマに基づく応用ソフトウェアの構築支援環境の開発を行っている。

西岡 貞一
Teichi Nishioka

▼授業科目
コンテンツ制作論
コンテンツ形成手法研究

メディア論, 博物館情報・メディア論
デジタルメディア環境に関して、メディア論やメディア教育の立場から研究を行っている。映像表現を学ぶワークショッププログラムに関する実践研究に取り組んでいる。Virtual Reality や Augmented Reality を応用してミュージアムの情報発信機能を拡大するデジタルミュージアムの研究に取り組んでいる。

平賀 譲
Yuzuru Hiraga

▼授業科目
認知科学特論
情報認知研究

認知科学, 人工知能, 音楽情報科学
人間が音楽を聴き、楽しむ背景には、膨大で複雑な情報処理過程が存在している。そのような認知過程、特に高次の構造認識的な面を、コンピュータ上の認知モデル構築を通じて理解・解明することが主要なテーマであり、また音楽情報検索への応用なども取り上げる。ゲーム・パズルの解決過程など、他の認知過程のモデル化にも関心がある。

藤澤 誠
Makoto Fujisawa

▼授業科目
画像・映像メディア処理

コンピュータグラフィック技術研究, 物理シミュレーション技術研究
計算機の発達に伴いコンピュータシミュレーションが様々な場面で活用されている。その中でも特に物理法則に基づくシミュレーションに注目し、自然現象をコンピュータ内で再現することで、コンピュータグラフィックスアニメーションやインタラクティブなアプリケーション、拡張現実感などに応用する研究を行っている。

三河 正彦
Masahiko Mikawa

▼授業科目
ヒューマンコンピュータ・インタラクション
LIS研究の最新動向
情報メディア開発特別研究II

ロボティクス, インタフェイス, ロボットビジョン
ネットワークを介して、人間と人間、あるいは人間と機械間で円滑にコミュニケーションおよび共同作業を実現するには、音声や映像だけではなく、指し示す、触る、動かす等の実世界へ働きかける動作と、それらを知覚する機能の連携が重要である。そこで、ロボティクスを利用した知的システムまたは知的インタフェイスの研究を行っている。

宗村 泉*
Izumi Munemura

▼授業科目
メディア技術特論
印刷メディア表現文化研究

印刷メディア表現文化論印刷の歴史と表現技術研究
文化施設の展開と運営

コミュニケーション・メディアの原点でもある印刷メディアの生い立ちから成熟期に至る過程を、文化・技術の両面から俯瞰的に考察。印刷文化とそれを実現した技術の変遷を研究することにより、デジタルメディアの将来の姿をより明確に理解する。また博物館の設立、運営を通じて培った、コンテンツの保存や展示手法、マネジメントなどを実践にもとづいて研究を行っている。

森嶋 厚行
Atsuyuki Morishima

▼授業科目
データ工学特論
コンテンツ共有基盤技術
研究

データ工学, データベース
高度計算機ネットワーク環境やユビキタスコンピューティング環境の出現などによる近年の計算機利用パラダイムの変化に対応して、これからの社会に必要とされる高度なデジタルコンテンツ管理、検索、統合、変換等を実現するための先端ソフトウェア技術の研究開発を行っている。主にデータベース関連技術やXML等のWWW関連技術などを用いたアプローチを行う。

森田 ひろみ
Hiromi Morita

▼授業科目
認知科学特論
LIS研究の最新動向

実験心理学, 認知心理学
心理実験手法を用いて人間の認知過程の基礎および応用的研究を行っている。研究対象は、視覚情報処理、視覚的注意、イメージ操作、連続的運動の学習、スクロール表示された文章の読み易さと眼球運動の関係、ホームページ閲覧の際の注意移動経路などである。

寺澤 洋子
Yoko Terasawa

音響合成, コンピュータ音楽, 音楽心理学, 音響学
音を主な媒体とするマルチモーダルなコミュニケーションのモデル化を目標とし、「音色を媒体とした表現の理論化を行い、戦略的な応用につなげる」「音楽表現の認知プロセスを理解し、より効果的な情報表現を行う」等の視点から、音色知覚モデル、データ可聴化、音楽情動、音楽インタラクションの研究を進めている。

林 勇吾
Yugo Hayashi

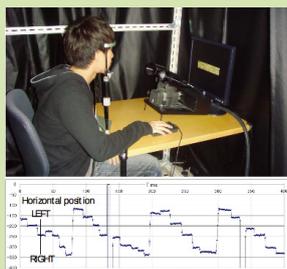
Human-Computer-Interaction, 認知科学
人間のコミュニケーションを支援するためのインタフェースのデザインを研究しています。特に、擬人化・対話エージェントを用いて人間の認知活動(問題解決や学習、創造性、意思決定等)を促進する方法に取り組んでいます。アプローチとしては、モデルベースによる心理実験やシミュレーション、システム開発を行っています。

森田研究室

心理実験から認知の仕組みを探り、 情報機器のデザインに生かす

情報機器を扱う人間の認知特性を調べています。心理実験の経験がなく、本格的に心理学の勉強をしたこともない、でも人間のことに興味があるという学生が、心理実験のやり方を一から学んで、学会発表や論文執筆まで行っています。

スクロール表示特有の読み方を眼球運動から探る
携帯型端末や電子書籍の普及に伴い、スクロール表示の利用機会は急激に増えています。でも、紙媒体とスクロール表示の読み方や基本的な認知特性の違いは、まだ良く調べられていません。本研究室ではスクロール表示を読んでいるときの眼の動きを調べ、そこからスクロール表示の読み特性を解明しています。目的に応じてどのような表示の仕方が良いかを提案することを目指しています。



単に心理現象を計測するだけでなく、その現象がどんな仕組みで起きるのか、私たちの脳の情報処理をどう反映しているかを考えていく奥深い研究分野です。

アイコンの見た目とその意味の連合関係の記憶を探る

アイコンやサインは見た目が意味を持ち、取るべき行動を指示しています。良いサインは、見た目でどう行動すれば良いかがわかります。サインの視覚特徴のうち、最も行動につながりやすい特徴は何か、見た目と意味がどのように学習され一般化されていくのか、また視覚的特徴を組み合わせることの効果などを調べています。GUIのわかり易さの向上や情報の重畳に役立つことが期待されます。



平賀研究室

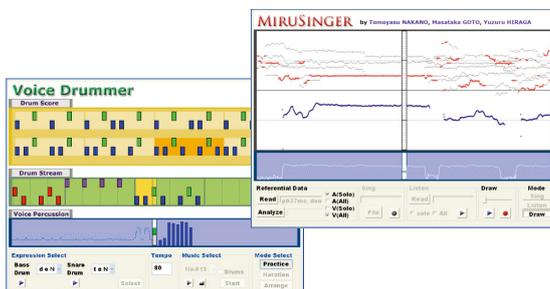
コンピュータと音楽

～音楽分析・音楽聴取過程の研究～

コンピュータを始めとするデジタル技術は、いまや音楽作品の創作や音楽情報の提供などに不可欠の存在です。それと並行して、音楽の様々な側面を分析したり、人間の音楽聴取過程を解明していくことも重要で魅力的な課題です。本研究室ではそのような音楽分析・音楽認知に関わる研究に取り組んでいます。

楽曲の主題・変奏関係の構造解析

変奏曲の主題と変奏の間には密接で精緻な関係があります。その対応関係は複雑で、人間の聴き手にもわかりやすいもの、気づきにくいものがあります。それをコンピュータによる構造解析で抽出しようという研究を行っています。これは音楽研究一般や、高度な音楽情報検索などへの応用が期待できます。



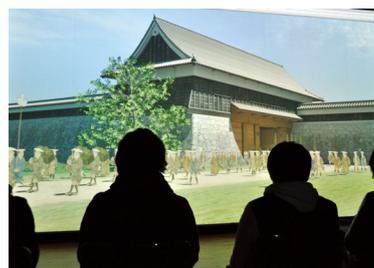
歌声・歌唱の分析

最近は歌声・歌唱研究への関心が高く、vocaloid などのシステムで実用化されています。その一環・先駆として、音声による打楽器パターン入力(左図)や、歌唱のうまさの評価の基礎研究及び評価システムの作成(右図)などの研究を始めとして、歌唱や歌詞に関わる研究テーマに取り組んでいます。

21世紀のメディア環境のテーマは「楽しく、気持ちよく」



ソーシャル・メディアによる
情報表現・発信の研究
タブレットPCを用いた
映像表現ワークショップ。



大型バーチャルリアリティ映像の評価実験
3DCGキャラクターアニメーションによる
群衆表現を応用し、熊本城下参勤交代の
「雰囲気」を再現

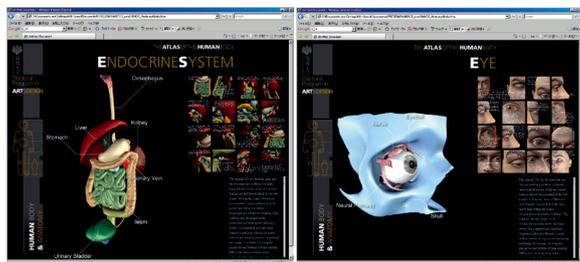
デジタルミュージアム

博物館ではVirtual RealityやAugmented Realityを用いて古代都市の様子や展示資料の背景を紹介する展示が行われています。デジタル技術を用いて、文化財の持つ魅力や文化的文脈を来館者にわかりやすく伝えようという展示手法はデジタルミュージアムと呼ばれています。我々は「博物館情報・メディア論」の立場からデジタルミュージアムの研究に取り組んでいます。

研究室独自開発3DCG RealTime SOFTWARE/HARDWARE Rendering ENGINE
による情報の可視化表現例



骨格シミュレーション (Hardware Rendering Engine)



WEBでのリアルタイムインタラクション例 (Software Rendering Engine)



芸術作品・リアルタイム3D(4K)表現

映画、物語、音楽、ゲーム、広告といったコンテンツは文化的にも産業的にもその重要性が高まっています。我々はこのコンテンツの教育・研究に取り組んでいます。コンピュータは省力化や効率化だけでなく、人々の生活を豊かにしてくれる道具です。“楽しい”、“きれい”、“ゆかい”、“ふしぎ”を合い言葉に2020年のメディアを一緒に創ってみませんか。

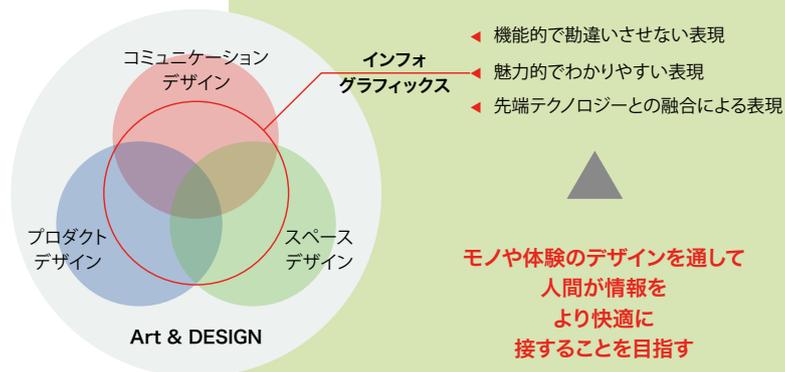
学びのデザイン

自らが参加、体験することにより対象への理解を深めたり創造性を高めようという学習手法が注目されています。我々はワークショップとよばれるこの学習手法に着目し、誰もが「映像で表現する力」を身につけるための映像制作ワークショップのプログラムの開発を続けています。

見えない物事を見える形へ

研究領域としての情報デザイン

インフォグラフィックスとは、複雑な内容やイメージしづらい物事の仕組みなどを、把握・整理し、視覚的な表現で他の人に「情報をわかりやすく伝えるグラフィックデザイン」のことです。絵や図で説明すると、言葉で伝わらないことでも簡単に理解できる。それが、インフォグラフィックスの目的であり、理想であります。本研究室では、インフォグラフィックスをテーマとしたコンテンツを次々と世の中に発信していきます。



藤澤研究室

物理ベースコンピュータグラフィックス

概要

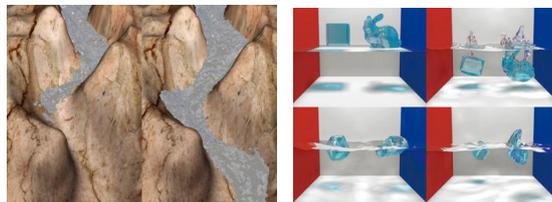
物理法則に基づき物体の動きをシミュレーションすることで、CGアニメーションとして映像を創り出す研究、インタラクティブなアプリケーションに応用する研究を行っています。

リアルタイム乱流シミュレーション

滝や洪水、煙など我々の日常にみられる流れはとも複雑です。このような複雑な流れを乱流といいます。我々の研究室では、GPUによる並列計算をもちいて高速化したウェーブレット解析と粒子法により、乱流をリアルタイムでシミュレーション、CGアニメーションとして再現する研究を行っています。

氷解・沸騰シミュレーション

氷が溶ける氷解現象や沸騰現象は、われわれにとって身近な自然現象であり、コンピュータアニメーションのリアリティを高める上で欠かせないものです。本研究では、熱力学・流体力学に基づいて氷解・沸騰現象のアニメーションを生成する手法を提案しています。伝熱現象を再現するだけでなく、溶けた後の液体や周囲の空気の振る舞いによる影響も表現することができます。



三河研究室

知覚情報、ロボティクスに基づく知能システムの研究

概要

本研究室では、画像などの知覚情報処理や、それらを応用した知的なロボットシステムの研究を行っています。人間と知能システム間で、より自然な操作やコミュニケーションの実現を目指しています。

歩行者のシルエットに基づく識別手法を用いた図書推薦サイネージシステムの研究

歩行者の歩容映像に基づき、その性別や年齢層を識別し、それぞれに適した図書を推薦するシステムの研究開発を行っています。本手法では、歩行者のプライバシーを重視し、シルエット映像から特徴抽出を行い、男女や年齢層等を識別できます。識別結果に基づき、それぞれに適した書籍の推薦を行うデジタルサイネージシステムを構築しました。

図書館司書ロボットの研究・開発

図書館利用者と会話ことができ、館内の案内や蔵書の検索等の機能を有します。また、たくさん

の外見センサを備える図書館司書ロボットの知覚情報処理系は、睡眠覚醒機能に基づき制御され、図書館利用者がロボットの周りに居ない時には、外見上は居眠りをしているように見え、内部では覚醒時に蓄積したセンサ情報等の解析を行うといったユニークなロボットです。限られた計算機資源を有効に利用しつつ、居眠りすればするほどますます賢くなるロボットの実現を目指しています。

上記以外にも様々な研究を行っています。詳しくはホームページをご覧ください。

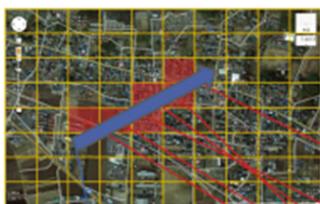
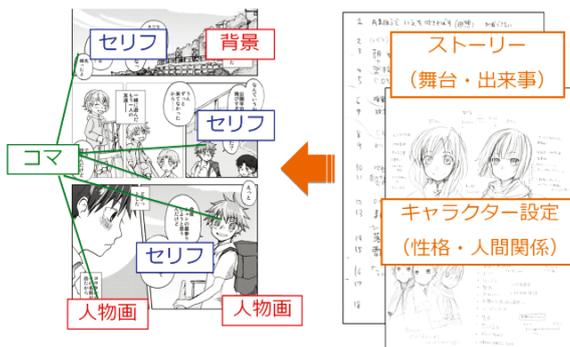
<http://www.slis.tsukuba.ac.jp/~mikawa/>



未来の知の共有をデザインする

デジタルマンガの未来をデザインする

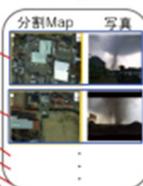
近年、デジタル環境でのマンガの製作や配信が進んでおり、ネットワークを利用したマンガの配信サービスや、PCを利用したマンガ制作が浸透しています。これにともない、ネットワーク上でのマンガコンテンツの流通や管理が重要な関心を集めています。デジタル環境におけるマンガ制作の支援や流通支援には、マンガに関するデータを適切に設計することが重要です。マンガの内容を適切に表現するメタデータはどのようなものか、また、それに基づいた先進的デジタルマンガ制作支援や流通基盤に関して研究を行っています。



現地以外の群衆



2. 小さなタスクに分割し、状況を推測



Some pictures are taken from Wikimedia Commons

メタデータ共有の未来をデザインする

インターネット上の情報流通や統合を効率よく進めるためには、データに関するデータ(メタデータ)を世界の皆で上手に共有することが鍵となります。そこで、メタデータの相互運用性向上のための情報基盤の構築を世界のメタデータ標準化組織や総務省などと共に進めています。

基本情報参照		関連情報参照	
項目名	値	項目名	値
名前(識別子)	meta	名前(識別子)	meta
名前空間(URI)	http://sds.sda.tokuba.ac.jp/rdmeta/	名前空間(URI)	http://www.rdf.gr.jp/rdmeta/
バージョン	http://sds.sda.tokuba.ac.jp/rdmeta/	バージョン	http://www.rdf.gr.jp/rdmeta/
バージョン情報 (Reg:version)	v0.4	バージョン情報 (Reg:version)	v1.0
タイプ	マンダメタデータ定義	タイプ	Application Profile
コメント (Reg:comment)	マンダメタデータ定義	コメント (Reg:comment)	マンダメタデータ定義
作成者 (Reg:creator)	森嶋大智	作成者 (Reg:creator)	森嶋大智
作成日 (Reg:created)	2011-02-24	作成日 (Reg:created)	2011-02-24
更新者 (Reg:updated)		更新者 (Reg:updated)	
更新日 (Reg:updated)		更新日 (Reg:updated)	

知の結集の未来をデザインする

インターネットなどを通じて不特定多数に仕事を委託するクラウドソーシング技術を用いて、人々と計算機の知の結集を実現するための技術について研究を行っています。大きな問題を細かく分割して何万人もの人々や計算機で分担することにより、これまでは不可能であった問題解決を可能とする技術の研究を推進しています。例えば、大きな自然災害があり現地の人々が大きな困難に直面しているときに、現地以外の人々が協力して、現地の災害状況を把握し、専門家の迅速な対応を支援する、そのような仕組みの研究を推進しています。

研究科の活動

情報学の教育研究の新しい潮流を探る国際連携

グローバルなネットワーク情報化が進む現代社会においては、教育研究におけるグローバルな潮流を知り、グローバルなコミュニティに対して発信していくことが求められています。国際的な連携を進めるために、図書館情報メディア系では、伝統的な図書館情報学を基礎にしつつ、その枠にはとられないことなく、新しい情報学の教育研究の新しい潮流を国際環境の中でつかむ努力を続けてきています。

図書館情報メディア系では、ピッツバーグ大学の情報学研究科、デンマークの王立図書館情報大学の大学や国立図書館等と交流協定を結び交流を進めています。その一例として、2008年以来、韓国の釜山大学、中国の中国人民大学との3大学連携による国際会議を毎年開いています。

インターネットの爆発的な発展にともなう情報環境の大きな変革に従う形で、北米の有力な図書館情報学の大学院では、伝統的な図書館情報学の枠組みからネットワーク情報化社会を志向した Information School へのシフトが進められてきました。Information School というのは、従来の学術領域の枠を越えて、情報を核として人とそのコミュニティを結ぶ学問領域の研究教育を行う大学院や学部です。現代社会では、人とコミュニティ、多様な知

識情報資源と情報技術に関する知識を総合的、有機的に結びつけることが求められます。伝統的な図書館情報学には、図書館で培われてきた人とコミュニティ、知識情報資源に関わる豊富な知識や技術が含まれます。Information School は、これらに加えて、ネットワーク社会を指向した新しい情報技術を取り込み、従来の領域の間にある壁を取り払い、新しい領域を開拓する取り組みです。

図書館情報メディア系でも、こうした新しい情報学教育研究の潮流をいち早く取り入れてきました。2012年には Information School の世界的組織である iSchool に、我が国唯一のメンバーとして参加しました。iSchool は北米を中心として研究指向の強い 30 余りの大学が参加している世界的組織です。また、2008年12月には、Consortium of Information Schools in Asia-Pacific (CiSAP) が設立され、2012年現在 CiSAP には 11 国から 24 大学が参加しています。図書館情報メディア系は設立時からの中心メンバーとしてアジア太平洋地域における Information School の交流、協力の推進を図っています。



図書館情報学図書館の貴重資料と大型コレクション

百万塔及び自心印陀羅尼

百万塔陀羅尼は日本における現存最古の印刷物です。『続日本紀』などによれば、奈良時代に藤原仲麻呂の乱が平定された(764年)後、称徳天皇の発願によって小さな三重の木製塔が百万基つくられ、それぞれに無垢浄光大陀羅尼經のうち、根本、相輪、自心印、六度のいずれかの陀羅尼(呪文)が納められ、法隆寺などの諸寺に寄進されました(770年)(所蔵は自心印陀羅尼。[図1])。このとき奉納された印刷物が百万塔陀羅尼と通称されるものです。使用された紙は麻や楮から作られたものです。書誌学などの研究成果によれば、印刷方法は木版あるいは銅版によるという二つの説があります。日本における現存最古の印刷物が仏教と深いかかわりをもって製作されたことは、当時の社会や文化とあわせて考える必要があります。

グーテンベルク42行聖書零葉

グーテンベルク(Johannes Gutenberg, 1400頃-1468)は15世紀半ばに金属活字による活版印刷術を開発しました。『42行聖書』はグーテンベルクがドイツのマインツで印刷したとされる聖書であり、2段組みで1段がおもに42行となっています。『42行聖書』にはヴェラム(羊皮紙)に印刷されたものと、手漉き紙に印刷されたものがあり、図書館情報学図書館には手漉き紙を使用した零葉(一葉)があります[図2]。内容は旧約聖書の「エゼキエル書」の一部です。

グーテンベルクによって発明された機械的印刷は、その後ヨーロッパで急速に広まり、書物の大量生産を可能にしました。というのも、ヨーロッパ中世の写本は人手によって書き写すことで生産されていたからです。近世以降、豊富なコレクションを所蔵する大規模な図書館が西欧でつくられてきた背景にはこうした書物の大量生産がありました。欧米ではグーテンベルクによる活版印刷術の発明が社会や文化に及ぼした影響についても研究されています。

アメリカ図書館学・書誌学基本文献集

「本についての本」を収集したコレクションで、図書館の管理運営一般や図書館利用法、図書館の歴史、書誌学の基本図書はもちろん、読書論、図書印刷技術の歴史、装丁とその歴史、活字の開発史、原始・古代の印刷、古書・稀覯書の蒐集、手書き本、バイブル印刷史、ブック・イラストレーション、銅版画の歴史、新聞の歴史、著名な図書館創立者の伝記、絵本の歴史をはじめ、アンダーグラウンド出版物の歴史や日本の浮世絵のフランス印刷技術への影響を考察しためずらしいものなども含め、図書館学、書誌学の広い範囲をカバーするものです。

ロシア・ソ連書誌図書館学資料集成

古代より現代に至るロシア・ソ連において生みだされたあらゆる写本・古版本、活字印写本、自筆文書に関する書誌、科学アカデミー・大学・政府機関・国会・神学校・修道院・宗教会議・博物館など公的図書館および貴族愛書家個人の蔵書目録、出版社・古書店・有力書店の図書目録、書物史・印刷史・書物取引・図書館学史など、およそ出版物に関する図書・雑誌・逐次刊行物の一大集成で、IDC社(International Documentation Co.)のマイクロフィッシュ版です。

“Encyclopedie methodique, ou, par ordre de matieres” Chez Panckoucke (パンクック「系統的百科全書」)

フランスの『百科全書』補遺の出版元としても知られるパンクック(Charles Joseph Panckoucke, 1736-1798)が企画した百科事典コレクション(全200冊)です。主題別配列を特色とし、娘の代になって漸く完成した大事業でした。



▲ 図1. 自心印陀羅尼



▲ 図2. 42行聖書零葉

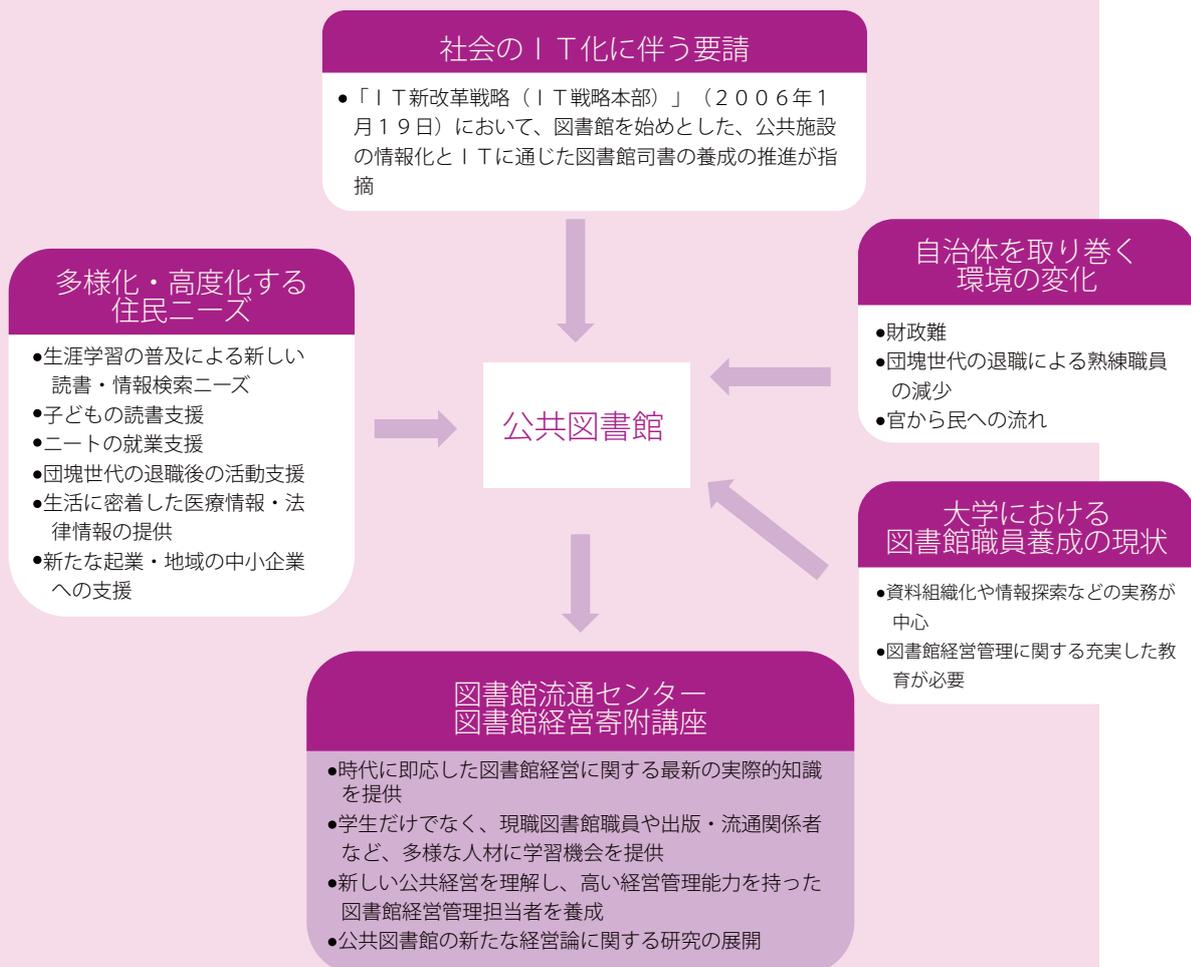
図書館流通センター図書館経営寄附講座

公共図書館をめぐる今日の環境において、図書館経営のための人材養成は重要かつ喫緊の課題です。この点を認識し、株式会社図書館流通センターから提供された奨学寄附金により、2006年度より2015年度までの予定で「図書館流通センター図書館経営寄附講座」が開設されています。

株式会社図書館流通センターは、1979年に出版界の総意によって社団法人日本図書館協会事業部の業務を継承する形で設立され、現在では全国の

図書館への図書の流通・販売、目録情報の作成・流通等の図書館サービスへの支援に深く関わっています。

寄附講座では2名の教員を採用し、公共図書館等の経営の基本的な枠組みである公共サービスと公共経営に関する教育を行うとともに、公共サービス研究、公共経営研究、図書館情報メディア研究を総合的に統合して、図書館の新経営論に関する研究に取り組んでいます。



履修証明プログラム図書館経営管理コース (<http://www.slis.tsukuba.ac.jp/grad/education/LM/>)

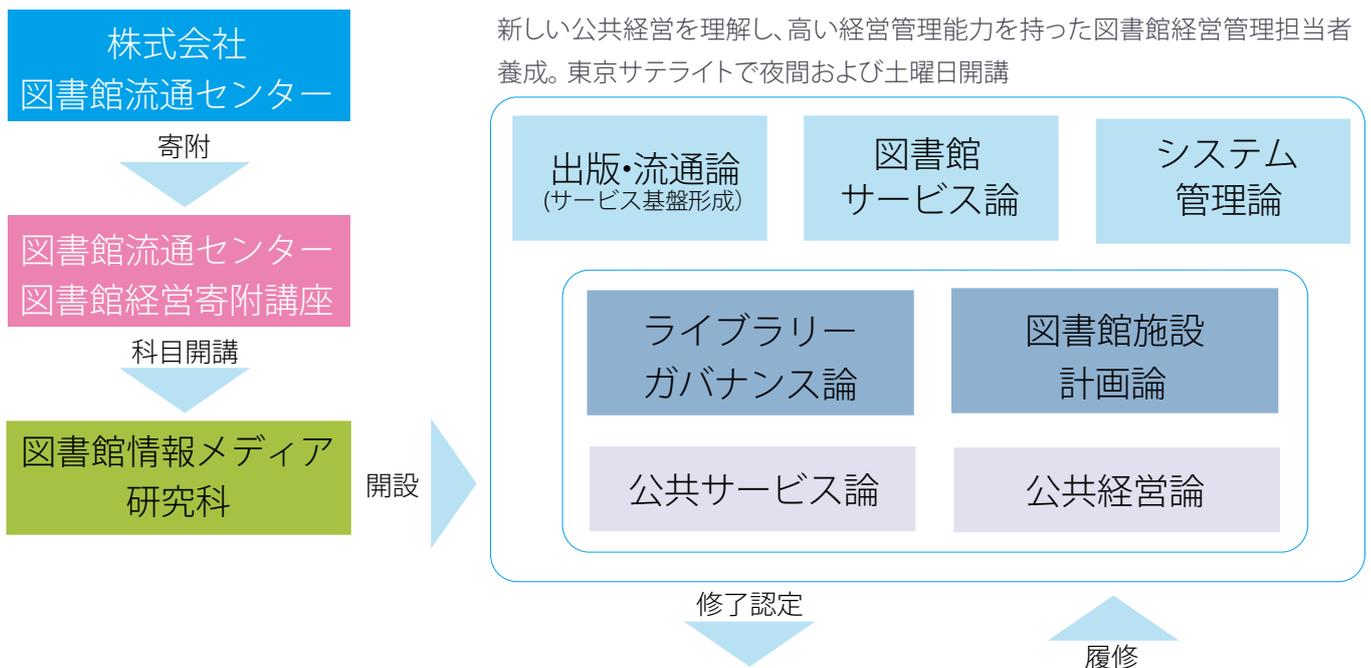
図書館の経営管理者を養成します！

図書館経営管理コースは、2011年度から「履修証明プログラム」として開設されています。公共図書館や中小規模の大学図書館の経営管理、大規模図書館の部門管理などに携わるうえで必要な知識と能力を開発するため、最新の実践的

知識を学ぶ機会を提供することを目的としています。東京サテライトで夜間と土曜日に開講される7科目175時間の講習を受講し、各科目の試験に合格することによって筑波大学長より図書館経営管理コース「履修証明書」が与えられます。

図書館経営管理コース

新しい公共経営を理解し、高い経営管理能力を持った図書館経営管理担当者養成。東京サテライトで夜間および土曜日開講



● 想定される受講者

- 図書館の経営管理に携わっている方
- 図書館の経営管理を学びたい方

● 具体的な応募資格

- 司書資格を持つ人、および図書館に関わる3年程度の実務経験を持つ人

知的コミュニティ基盤研究センター(<http://www.kc.tsukuba.ac.jp/>)

本研究センターは、ネットワーク上で、あるいはネットワークを利用して形成される多様なコミュニティについて、それらに必要な知的情報基盤に関する研究を行い、コミュニティの発展に寄与することを目的としています。図書館情報メディア系に属する研究センターとして、図書館情報メディア研究と、国際連携、コミュニティ連携活動のフロンティアを担っています。本研究センターは後に示す4つの研究部門から成り立っており、それぞれが特色ある研究を進めるとともに、様々なコミュニティと連携した研究活動を行っています。

本研究センターでは、開設以来、研究談話会、国際シンポジウムの開催など、国内外のコミュニティ

「知の表現基盤」研究部門

知的コミュニティにおける知識伝達や情報探索を考えると、その知識情報をどのように表現するかは重要な課題です。本研究部門では「様々な場面で利用される知識の特徴を解明し、その効果的な表現を可能にすることで、社会における知識の有効活用の促進に貢献する」ことをミッションに、(1)複雑な意思決定や問題解決の仕組みとその支援における表現、たとえば、医者やパイロットなどの即

「知の共有基盤」研究部門

ネットワーク上では、誰もが知識の提供者でありかつ、知識の利用者にもなり得ます。知的コミュニティは、ネットワーク上で知識と情報を協調的に共有する環境を利用して、知識や情報の資源として利用できるコンテンツ、すなわち情報資源を多く作り出します。本部門は、いろいろなコミュニティと連携し、知識と情報を協調的に共有する環境に関わる研究を進めることを役割としています。

本部門では、ネットワーク上においてコミュニティが生産した情報資源を蓄積し、共有し、そして利用するために必要な情報技術の研究開発を行っています。特に、情報資源の共有と相互利用性の向上を中心的な研究トピックとして、デジタルライブラリやデジタルアーカイブ、それを支えるネットワーク指向のメタデータ技術、さらにそれらの基礎とな

との連携を重視した活動を続けてきています。2011年12月には「デジタルキュレーションシンポジウム一時を越え、違いを越えて知をつなぐ」、2012年12月には「知的コミュニティに関する国際シンポジウム2012—コミュニティの違いを越え、時を越えて情報資源と利用者を結ぶ—」を開催しました。また、Dublin Core Metadata Initiativeとの連携によるメタデータスキーマレジストリの運用、アジア太平洋情報学教育研究コンソーシアム(CISAP)の立ち上げとその連携推進といった国際的な活動を進めています。

時的判断が求められる専門家の意思決定、生命体の遺伝子ネットワークの表現、(2)貴重な文化遺産の表現、たとえば、古銅印と糸印の識別研究と閲覧システムの構築、(3)会話や文章を通じた対話における表現、たとえば、笑いを生む要素とその表現に関する研究、(4)情報探索における表現、たとえば、情報要求(質問)の表現や検索結果の可視化、感性の表現に着目した検索といった研究を展開しています。

るデータベース技術に関する研究を中心に進めています。具体的には、メタデータ規則を蓄積共有するメタデータスキーマレジストリを核として、メタデータの相互運用性を高めるための情報基盤に関する研究、クラウドソーシングを活用して作る人間の知とコンピュータの知を組み合わせた新しい情報環境の研究、ネットワーク環境におけるデジタル情報資源の長期保存とデジタルアーカイブの長期利用のための技術に関する研究などを中心的な研究テーマとした研究を進めています。また、Dublin Core Metadata Initiative (DCMI)との連携やデジタルライブラリや図書館情報学領域の国際コミュニティとの連携など、国内外の組織とも協調しながら研究を進めています。

「知の伝達基盤」研究部門

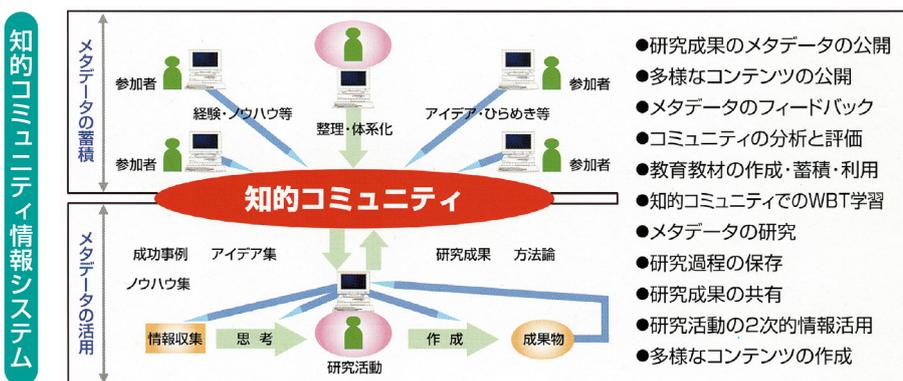
本部門では“情報伝達”という要素について、知的コミュニティの構成員という利用者側からと提供者側双方の視点から図書館・情報サービス機関について研究を行っています。すなわち、知の主体としての人々の情報行動から、人々と知識情報資源の相互作用、知の集積としての知識情報資源の社会的形成(知の伝達基盤:図書館・博物館・文書館等とネットワーク情報資源)にいたる世界に照準を合わ

せています。具体的にはネットワーク社会における公共図書館サービスの最適化、研究者の情報行動の変容、電子情報メディアの進展、研究者の共著や引用関係に基づくネットワーク分析、オープンアクセス状況におけるコンテンツ利用の実態、大学図書館を中核とした学習環境モデル構築等の活動が行われています。

「知の環境基盤」研究部門

本部門のミッションは、コミュニティの中、あるいはコミュニティの間で知識と情報を共有し、高めていくための諸要素に係る研究を、関連するコミュニティとの連携の下に進めることです。本部門では、ネットワーク情報化社会を指向したアーカイブ、大量のデータに支えられるソーシャルネットワークに関する研究課題、図書館(Library)、博物館・美術館(Museum)、公文書館・資料館(Archives)等のMLAと総称される知の記録機関(Memory Institution)、情報学領域の研究教育組織(Information School)

との連携的活動に取り組んでいます。こうした活動の一環として、震災による被災文書のレスキュー活動の経験に基づき、被災自治体との連携によるコミュニティの記憶と記録を残すための研究活動や、アジア太平洋地域の大学間でのInformation School間連携のためのワークショップの開催等の活動を推進しています。こうした活動を通じて国内外のコミュニティとの連携を進めるとともに、大学院生の活動への参加も進めることで、コミュニティを支える次世代の人材の育成にも寄与しています。



連携機関

凸版印刷株式会社

トッパンは1900年創業以来、印刷技術の発展と印刷文化の継承に寄与し、現在では、印刷テクノロジーを核とした「情報・ネットワーク系」、「生活環境系」、「エレクトロニクス系」、「パーソナルサービス系」、「次世代商品系」の5つの事業領域において、海外を含めた地域で幅広く事業を展開しております。

また、情報メディアに関しては、これまでトッパンが蓄積してきた文字・画像分野のデジタル技術を基盤とするマルチメディア展開と、それぞれの表現特性に合致した感性豊かなコンテンツにより情報・ネットワーク事業を推進しております。

活字から始まった印刷技術がデジタル技術による文字画像一環処理を経て新たな電子出版の時代を生み出そうとしている現在、これまでの印刷文化の変遷を印刷博物館の学芸研究と展示から学び、電子出版分野での重要な要素である文字についてあらためて検証することによって得られる知見は、将来への重要な示唆となります。

また、最先端の画像処理技術を駆使したバーチャルリアリティ（VR）による文化財コンテンツ分野では、世界遺産を含む多くのコンテンツを蓄積し既に様々な形態のミュージアムで公開が始まっております。

株式会社電通

電通は今でこそ国内最大手の広告会社ですが、その社歴はトリビアの連続でした。1901年に創業したときの社名は、実は電報通信社で、当時勃興しつつあった新聞業向けに記事を作って売っていたのです。電通という今の名称は、この電報通信社に由来しています。

新聞社の業績が伸びれば電報通信社の業績も伸びるという意味で、当時の両者は言わば一蓮托生。新聞の経営を助けるために、電報通信社は広告業も営んでいました。戦争の足音が近づく1936年には、通信部門を国策企業の同盟通信社（後の共同通信社、時事通信社）に移譲し、広告専業となります。戦後は1951年の民間ラジオ放送、53年の



▲ 「唐招提寺展」でのVRコンテンツ上映風景



▲ 印刷博物館

民間テレビ放送の開始とともに、業容を拡大。通称だった電通という呼び名を正式社名にしたのが55年で、現在に至るといわけです。

このように時代の変化に柔軟に対応しつつ、時には副業を本業にするほどの大胆さを身上とする企業DNAこそ、電通の最大の武器なのかもしれません。さて、過去100年を振り返っても、今ほどのメディア環境の大変革期はそうはありません。おそらくはテレビの登場に匹敵すると言っても間違いではないでしょう。変化はチャンス。情報メディアに関連して、さまざまなビジネスチャンスが見つかるはずですよ。

